文學博士 久松潛一著

萬葉集に現れたる日本精神

東京 至文堂

昭和十二年一月二十三日印刷
昭和十二年一月二十七日再版發行
昭和十二年二月一日發行
昭和十二年二月五日再版發行
昭和十二年二月八日六版發行

萬葉集に現れたる日本精神

定價 金八拾錢

著者 久松潛一

發行者 東京市牛込區拂方町二十七番地 佐藤正叟

印刷者 東京市京橋區銀座西二丁目三番地 高橋郁

東京市牛込區拂方町二十七番地

發行所 至文堂

電話牛込(34)四四五五番 四四五六番
振替口座東京二九五〇七番

三協印刷株式會社印刷

序

昨年の春から今年の春にかけて歐米文化の巡禮者となつた私が、念頭に去來したものは日本文化わけて日本文學の特質は何であるかといふことであつた。それと同時に日本文化や文學が西歐に如何にとり入れられて居るかといふ點も私の關心の的であつた。さうして萬葉集が世界の代表的文學作品と考へられつゝある現狀を知つて愉快に堪へなかつた。

歸來ラヂオの朝の修養講座に於て萬葉集に現れた日本精神を講ずるやうに請はれたので、いさゝか感ずる所をのべたのである。本書はその時の覺書にいさゝか筆を加へ、更に從來雜誌等に發表した萬葉集に關する雜筆九章を添へて、こゝに小冊子とすることにしたのである。本書をまとめたに就いては日本の古典萬葉集を日本國民の出來るだけ多くの方々に知つていたゞきたい微衷であるとともに、私にとつて別の思出もあるのである。

日本を離れて私はまもなく五歲になる愛兒明子を失つた。明子の死を報ずる便りは故國からの最初の便りであつたのである。私の心はくだけるばかりであつた。たゞ故國の知る人々の恩

情と私の理性とはくだけんとする心をわづかに救つてくれた。私は亡き子の靈と常に二人ある如き心持で歐米の遍歴をつゞけた。ラフアエロのマリヤの畫を見る時にも、ベニスのピヤツサンマルコの鳩の群れを見ても吾子の面影はあり〳〵と浮んだ。私は稚き子の思出として小さい美しい本を作つて亡き子の靈にそなへようと思つた。この書とやがて世に出したい遊歐隨筆「西歐に於ける日本文學」とはさうした私の思出のもとにまとめたのである。これをはかなき事と笑ふ人は笑つていたゞきたい。私は一人の日本人として日本文化や日本文學を愛し、その特質や精神を考へるとともに、一人の弱き人間として稚くして世を去つた亡兒の冥福を靜かにいのりたいのである。

昭和十一年十二月三十一日

久松潛一

目次

萬葉集に現れたる日本精神

一　萬葉集と「まこと」……一
二　萬葉集と敬神……九
三　萬葉集と忠君愛國……一九
四　萬葉集と親子の愛・家の尊重……二八
五　萬葉集と自然の愛……三七
六　萬葉集と和の精神……四六

萬葉集雜考

一　眞實なる感動……五五

二　萬葉集の歌人……五九
三　柿本人麿の歌……七七
四　山上憶良の歌……八五
五　萬葉集の季節感と年中行事……九九
六　東歌に關して……一二五
七　萬葉集の歌枕……一二八
八　萬葉集の歐語譯……一三四
九　萬葉集と世界文學性……一四〇

一　萬葉集と「まこと」

私はこれから萬葉集を通して、日本精神即ち日本人としての道や理想の一端を御話して見たいのである。

萬葉集はいふまでもなく日本の古典文學の中、最も尊重すべき作品の一である。日本民族の眞實なる感動が率直に力强くうたはれて居るのである。さうして日本精神は日本人が肇國以來有する理想であり、日本人の道である。古くから言はれて居る言葉で言へば日本魂である。もう少し具體的に申せば「まこと」の精神を根柢として、敬神と忠君と愛國の精神とが渾然と一になつて居る境地である。さうして忠と孝とが一體になつて、忠を行ふことが孝となり孝を行ふことが忠となるといふ境地である。而もそれが國家、國民全體の和の精神の上にたつて居るのである。さういふ精神こそ、日本民族が幾千年來理想として來た道であり、また立派に實現されて來たのである。さうして今後も永遠に實現されてゆくことを疑はない。

萬葉集は日本人の眞實な心がうたはれて居るのであり、從つて萬葉集には日本民族の道や理

想が力強くうたはれて居るのである。大和魂が脈々として萬葉集の歌の中に生きて居るのであり、日本精神が萬葉集の一首一首の中に現れて居るのである。

そのためにこそ萬葉集は千數百年前の歌であるに拘らず我々の心に生きてうつたへるものがあるのである。

さて日本人としての道、日本民族の理想となつて居る點を擧げればいろ〳〵の點があるが、第一に、その根柢となるもの、即ち日本人の心構へとなる點として、「まこと」といふ精神を擧げたいのである。人生に於て私は「まこと」ほど尊むべきものはないと思ふ。我々は少し位愚であつても決して恥づべきことではない。しかしながら「まこと」のない人間であつてはならない。「まこと」のある人こそ眞の日本人である。「まこと」は「眞心」の現れである。近世の歌學者富士谷御杖によると、心を私心、一向心、眞心等に分けて居る。私心は利己本位な心である。一向心は感情本位の心で純な所はあるが、一方に偏するのである。公心は理性によつて行ふ正しい心ではあるが、人間的な情味がかけて居るのである。眞心は理性のみを主とする心ではなく、感情と理性とが調和して居る心である。人情もあり、而も理性から見ても正しい心である。かういふ眞心の現れが「まこと」である。從つて「まこと」は眞でもあり、善でもあるの

である。かつそれは美でもあるのである。日本の文學は古來「まこと」を理想とし、こゝに美があるとして來たのである。近世の俳人の鬼貫も俳諧は「まこと」であると言つて居るが、萬葉集を尊重した賀茂眞淵、古今集を重んじた香川景樹も、文學の中心に「まこと」をおいて居るのである。かくて「まこと」は眞であり善であり美であるが、而もそれ〴〵が別々にならないで一に渾然と融合した境地である。智と情と意との一になつた境地である。古く日本民族の理想を現す言葉として言はれて居る清明心、もしくは明く淨く直き心といふのはこの「まこと」の精神であるのである。明くといふのは智慧であり、淨いといふのは情であり、直きといふのは意である。明く淨く直き心はやがて智情意の圓滿具足した境地であり、「まこと」であるのである。この「まこと」といふ境地は必ずしも日本民族のみの理想ではないと見る考もあらう。たしかに人間に共通した點もあるが、しかし眞善美のこれほどに渾然と融合した境地は他の國民には容易にみだし難いのではないかと思ふ。本來分析をきらつて綜合的に物ごとを考へる日本人にしてはじめてこの眞善美の一體となつた「まこと」の境地を得るのではないかと見られる。かくて私はこの「まこと」こそ、日本精神の根柢となり、地盤となつて居るものであると考へるのである。私どもの一切の行爲も言說もこの「まこと」から出發しないものは人を動か

すことが出來ないのであるし、すぐれた文藝の世界も得られないのである。たゞ器用な歌、小手先きの文藝は到底人の心を動かすことは出來ないのである。たとへ一時の流行によつて器用な小手先きの文藝が重んぜられても、やがてそれはあかれてしまふのである。眞に永遠な文藝、不易な文藝はこの「まこと」のある所にあると思ふ。萬葉集の永遠性は實にこの「まこと」を根柢として居る所にあると考へる。

私は二三首の例を萬葉集から擧げてこの「まこと」の意味を敷衍して見たい。

たび人のやどりせむ野に霜ふらばわが子はぐくめ天の鶴群（たづむら）（卷九）

この歌は天平五年遣唐使に從つて支那にゆく人の母親が我子を愛する餘りに歌つたのである。遠くゆく旅人のやどるであらう野に霜がふつたならば、天とぶ鶴の群よどうか我子をはぐくんでやつて下さいといふ意味である。天とぶ鶴に我子をはぐくんでくれといふ點などは空想的に見られるかも知れない。しかしさういふ空想的な事柄を通して母の子を思ふ「まこと」の情が切々として見られるのである。遣唐使に從つてゆくほどの人物であるから成人した人であ

らうと思はれるのに、なほかういふことをうたはずには居られない所に母としての愛が見られるではなからうか。文藝に於ける「まこと」は必ずしも材料の上では想像をさけない。しかし如何なる空想的な事柄をうたつても、その中に「まこと」がある所に文藝として生きて來るのである。前に申した香川景樹といふ歌人も、歌の調を重んじて歌は調が根本であると言つて居る。所謂事實でない虛を材料としてうたつても、その調の中に「まこと」が現れるのである。親が子どもをしかつて、馬鹿とののしつても、その馬鹿とののしる調、即ち調子の中に子供を愛する親の情、親の涙が現れるのである。それが誠實であり、「まこと」であるのである。

更に一首を擧げると、

御民われ生けるしるしあり天地の榮ゆる時にあへらく思へば（卷六）

といふ歌がある。この歌は天平六年に海犬養岡麿（あまのいぬかひのをかまろ）といふ人が聖武天皇の詔に應じてよんだ歌であるが、この歌をよむ時に、平明な中に國民として國の榮えをことほぎ、その中に生きる喜びを心から感じた眞情が見られるのである。この歌が萬葉集の中でも特に愛唱されて居るのは、

さうした日本國民としての眞實な情が少しも飾らずに出て居るからである。この歌には思想として國家をことほぐ心持が見られるのみならず、この歌の調子の中に、自らそれが感ぜられるのである。それでこそ眞の歌としてもすぐれて居るのである。歌全體の中に國民の「まこと」がにじみ出て居るのであつて、それが人をひきつけるのである。

かくの如く國家に對し、子供に對して、いだく「まこと」の心が一切のものの上に、無限の愛となつて居るのである。更に萬葉集の中から夫婦の間の「まこと」の現れた歌の例を擧げると、旅にゆく夫に對する眞情をうたつた歌[註]がある。長歌の大意をあげると他の夫は皆馬に乘つて山城路をゆくのに、自分の夫だけは徒歩でゆくのを見るごとに心痛く堪へがたいので、結婚の折に母から形見にもらつたますみの鏡や、美しい領巾(ひれ)即ち肩かけのやうなものを以て金にかへて馬を買つて下さいといふ妻の純情をうたつて居るのである。いかなるものにもかへがたい母の形見をも夫のためには少しも惜まない妻の「まこと」の情に對しては、夫も

馬買はゞ妹かちならむよしゑやし石はふむとも吾(あ)は二人ゆかむ

とこたへるのである。馬を買つて自分だけは乘つても、妻がかちでゆくのはいやであるから、たとへ石はふむとも二人はともゞ〳〵に歩いてゆかうといふこの夫婦相互のまことの心の發露によつて、美しい夫婦の愛が完成されるのである（後の山内一豐の妻に見られるやうな美しい心の現れである）。〻これこそは萬葉集に現れた「まこと」である。自分自分の欲望をそのまゝにうたつたのでは、眞の「まこと」ではないのである。他人の氣持を顧み、互にゆづることによつて眞の自己の實現も出來るのである。智情意の圓滿調和した世界、眞善美の一となつた境地に於て人生の眞實なる道がひらかれるのである。それが淸明心であり、「まこと」であるのである。

四千五百首に近い萬葉集の歌はかういふ「まこと」をうたつて居るのである。それは古今集にしても新古今集にしても、更に、日本の多くの文學にしてもこの「まこと」を根柢に有して居るが、これを優美の情緒でつゝんだり、幽玄の世界の中で現したり、或は複雜な思想や事件のもとに表現して居るのに對して、萬葉集は最も素樸に最も純粹に最も熱烈にこの「まこと」をうたつて居る歌が多いのである。「まこと」は文學のふるさとであり、人間の故鄕である。「まこと」から出て、「まこと」にかへるのが日本文學の道であり日本人の道である。この「まこと」に於て文學も宗教も道德も一になり得るのである。萬葉集を通して、文學と宗教と道德と

の一になつた境地が見られ、日本人の理想や道が實現されて居るのも、萬葉集がこの「まこと」を根柢として居るためである。さうして萬葉集に於てもこの「まこと」の根柢の上にたつて、日本人としての道や理想のより具體的な方面が實現されてゆくのである。

註

つぎねふ　山城道を　人づまの　馬より行くに　おの夫し　徒歩より行けば　見るごとに
ねのみし泣かゆ　そこ思ふに　心し痛し　たらちねの　母の形見と　吾が持たる　眞澄鏡に　蜻蛉
領巾　おひなめ持ちて　馬買へわが春

反　歌

馬買はゞ妹かちならむよしゑやし石はふむとも吾は二人ゆかむ（卷十三）

二　萬葉集と敬神

前節に萬葉集に於ける「まこと」についてのべたが、次にその具體的な一方面として敬神の精神を中心にして申上げたいのである。萬葉集を讀んでいくと神をうたつた歌が多く見られる。さうして神を敬ふ心が至る所に見られるのである。この神を敬ふ心持が「まこと」の心の發露として見られるのが萬葉集の神の歌である。

さうして萬葉集に於て見られる神は民間信仰の對象となる精靈や自然神もあるが、最も崇敬される神は日本國家を作られた神であり、國家の祖先神にあたられる神である。日本國民の最も敬ひ信仰する神は天照大御神であることは古から變らないのであるが、萬葉集に於ても同樣である。

萬葉集に於ける最大の歌人柿本人麿には殊に神をうたつた歌が多く見られる。彼は長歌を多くうたつて居るが、その歌のはじめには常に高天原に於ける神々の國家建設に就いて語るのである。

さうしてかくの如き神々によつて作られた國家、その國家を作られた神の御するが治めたまふ國家をたゝへまつるのである。

この國家を作られた祖先神を最も崇敬するのは日本の國がらに於てはじめて見られるのである。伊勢神宮が國家の最も高く最も貴い神社であらせられることは、この思想にもとづいて居るのである。他の國に於ては神の信仰と忠君愛國の精神とは必ずしも同一ではない。日本に於ては敬神と忠君愛國とは全く同一になるのである。

さうして國家を創造された神の御するである天皇は現御神であらせられるのであつて、柿本人麿の歌には天皇を現御神としてたゝへる思想が常に見られるのである。人麿の歌に常に見られる言葉に

やすみしゝわが大君神ながら神さびせすと

といふ言葉がある。「やすみしゝ」は安くしろしめす意であり、わが大君は天皇をさして居るのである。神ながらは、神なるまゝにといふ意である。語源的に言へば「ながら」は「のから」

であり、「から」は國がら、家からの「から」であり、本體であるとも言はれる。神の本體が神からであり、神つからであり、神ながらであるとも見られる。神さびせすとの「さび」もその本體に徹する意であつて、翁さび、といふ言葉も翁の本體に徹する意である。かくしてこの言葉は安くしろしめす我天皇は神なるまゝに神の御精神に徹せられるといふ意味であつて、大君の本義をよく徹してといて居る重要なる思想である。この言葉を人麿は常にうたつて居るのであつて、大君を神と見奉る信念のもとに天皇を讃へまつつて居るのである。

かくして大君のもとには國土、國民のすべてが仕へまつるのみならず、自然も大君の前に歸伏するのである。柿本人麿に次のやうな歌がある。

大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも（卷三）

雷といふのは大和の雷山の事であるが、こゝではさういふ大和の山をよむことによつて自然の大きさをうたつて居るのである。雷は自然の中でも人をおびやかすことが大きいものである。地震雷火事親父、私どもはこの言葉を少年の頃から聞いて居つた。鬼のやうな顔をして太

鼓をたゝいて居る雷、これは自然の恐ろしさの一面の象徴である。雷山の上にいほりあそばすといふ事はさういふ恐ろしい自然も、神にまします大君の前には服從しまつることをうたつたのである。古い時代は自然の一々も神と考へられた。美しい花の咲くのを木花咲くや姫といふ神と申した。山の偉容を大山祇神として尊んだ。川の神、水の神、木の神もある。しかし一切の自然の神も國家の創造者にいます、神の前にはひれふすのである。もとよりそれは自然を征服するのではない。自然が自ら歸服するのである。人麿の次の歌はかういふ思想をよんだのである。

山川もよりてつかふる神ながらたぎつかふちに船出せすかも（卷一）

この歌は人麿が持統天皇の吉野宮に行幸あそばされたのに供奉してよんだ歌の反歌である。長歌の方に山の神も天皇に奉るみつぎとして春になると花をさかせ、秋になると紅葉が色づく、川の神も大君のめしあがる御料として上流には鵜で以てあゆをとらせ、下流にはあみをわたすとあるのである。それに對して山も川も御仕へ申す所の大君は、神さまでいらせられるまゝに

このたぎつ川に船出をあそばすといふ意味である。こゝに自然も人もすべてが神にまします大君に御仕へする境地が見られるのである。

人麿の歌に見られる敬神の精神は、現御神としての大君に對する忠誠の精神となるのである。さうして大君に對する忠誠はそのまゝ日本の國家を創造された神に對する崇敬の念となるのである。

この神に對する信仰をうたつたのは、人麿のみに止まらないのであつて、自然歌人の山部赤人にしても

すめろぎの神のみことの敷きます國のことごと（巻三）

といふやうに人麿と同じやうな思想をうたつて居るのである。彼は富士山をうたつても、

神さびて高く貴き駿河なる富士のたかねを（巻三）

といふやうに山にも神を見出して居る。

さうして殊に興味深く感じられるのは、萬葉集の中で、比較的外來思想を多くよんだと見られる所の山上憶良に於ても、神の信仰は見られるのである。憶良は儒教の影響をうくること多く、貧窮をうたひ、病の苦しさをうたひ、親子の愛をうたふといふやうに多彩な現實的な歌人である。而も憶良の到達した思想は、神に歸一する精神であつたのである。彼が支那へゆく人を送つた歌の冒頭に次の文句が見られる。

神代より言ひつてくらく虛みつ倭の國は皇神のいつくしき國言靈のさきはふ國と語りつぎいひつがひけり（卷五）

この意味は、神代からの言ひ傳へによると、日本の國は皇神の嚴としていまして治められる國である。言靈のさかえる國であると語りつぎ言ひかはして居るといふ意味である。皇神は天照大御神以來代々國をしろしめす天皇を申上げたのである。さうして言靈とは日本古代の信仰であつて、言葉には靈があり、生命がある。從つて一度口に出した言葉は行として實現される

べきものである。即ち言行一致の思想であり、言葉の尊嚴なる性質をよく認めた思想である。かくて日本古代には一言主神といふ言葉の神もあるが、かういふ言葉の尊嚴性を認めることから、呪文に對する風習も起るのである。即ち「秋のみのりゆたかなれ」といふと、その言葉の力によつてそのことが實現されるのである。子供が「夕燒小燒あすは天氣になれ」とうたふのも言葉の呪的性質を現して居るのである。さうして一反約束した言葉にそむくと事がらが破滅するのである。萬葉集にもあるが、浦島が玉手箱をひらいてはならないと言つた言葉にそむいて箱を開いたために浦島は忽ち老いて生命を失ふのである。是等の思想は言葉の力を認める言靈の信仰から來て居るのである。

さうして同じ萬葉集の中に日本は言擧げしない國であるといふことがある。[註] そのために日本は言葉を輕んずる國であるやうに見る見方もあるが、さうではなくして前にも申した如く、言葉はそれ自身實現する力をもつて居り、一反口に出して言つた言葉は實行しなければならないから、實行も出來ないやうな言をみだりに言はないといふのである。從つて言靈のさきはふ國といふことも言擧しない國といふこととは少しも矛盾するのではなくして、兩者を併せ考へることによつて、日本の國は言葉を重んじ、實行も出來ないことをみだりに言はない國であると

いふことである。即ち行を重んずる國であるといふことである。

從つて憶良のこの詞は、日本は神代以來神々が連綿として、しろしめして居る國であり、さうして行を尊重する國であるといふ意味である。これはまことに憶良のとなへた、日本精神論と見るべきである。外來思想や文化をとりいれながら、やはり皇神を中心とする神國思想を中心として居るのである。

この言により後に鹿持雅澄といふ近世の萬葉學者は萬葉集の本質をといて、皇神の道義と言靈の風雅を明らめる所にあると言つて居るのである。言靈の風雅といふのは、萬葉集が日本の言語による藝術であるといふ意味を現して居り、同時にさういふ言語藝術に即して皇神の道義が貫いて居ると考へたのである。これはまことに萬葉集を日本精神の立場に於て理解したすぐれた見解と見るべきである。

かくの如く萬葉集に於ては神を敬ふといふ精神が貫いて居り、而も神を敬ふことは國家を愛し、天皇に忠節をつくすことになるといふ精神となつて居るのである。が、さういふ思想の根本として人麿の繰返しうたふ所の

やすみしゝわが大君神ながら神さびせすと

といふ思想や憶良ののべた

倭の國はすめ神のいつくしき國

といふ言葉を擧げることが出來るのである。

それは一言にして言へば日本は神國であり、天皇は現つ御神であらせられるといふ國民的信念である。

萬葉集に於けるかくの如き敬神の思想からして、神に對しては常に崇敬の態度を以て祭られるのである。神を祭る歌は萬葉集にも多く見えるが、神を祭るのは日本に於ては神を恐れるのではなく、また神になれ親しむのでもない。どこまでも崇敬の態度を失はない。さうして國家の上に對しても日常の行爲に對しても神のみことのまにまに行ふといふ精神がみられるのである。

一切の行爲も神のみことによつて行ふといふこの精神が日本人の行である。萬葉集に於てもこの精神が常に貫いて居ると考へられる。

註

葦原の　水穗の國は　神ながら　言擧せぬ國　然れども　言擧ぞ吾がする　言幸く　眞さきく坐せと　恙なく　さきく坐さば　荒磯浪　ありても見むと　百重波　千重浪にしき　言擧げす吾は

反　歌

敷島の日本の國は言靈の佐くる國ぞまさきくありこそ（卷十三）

三　萬葉集と忠君愛國

萬葉集に於ける神の歌について敬神と忠君愛國とが完全に一になつて居る所に日本の精神の特質があるといふことを申したのであるが、次には直接敬神とふれないで、萬葉集に現れた忠君愛國に就いて申上げて見たいと思ふ。萬葉集には天皇の御仁慈の拜察される御歌も多いのである。特に天平四年節度使を諸道に遣された時に、聖武天皇がたまうた御製を拜誦すると、天皇の臣下を愛撫される御精神がさながらに伺へるのである。その反歌[註]だけを申上げると、

丈夫(ますらを)の行くとふ道ぞおほろかに思ひてゆくな丈夫のとも　（卷六）

といふ御歌であつて、節度使に對する御信頼の御心持が、その莊重な調(しらべ)の中に見られるのである。かういふ天皇の臣民に對する御仁慈に對して、臣民は忠節をつくして天皇につかへまつるのである。

ふる雪の白髪までに大君につかへまつれば貴くもあるか（卷十七）

この歌は左大臣橘諸兄といふ奈良時代の老臣のうたつた歌である。諸兄は勅を奉じて萬葉集を撰したといふ説もあるほどの人であつて、文藝にもたしなみの深かつた人である。その諸兄が天平十八年正月白雪がふりしきつて數寸も積つた日に、部下の臣とともに當時の太上天皇即ち元正天皇であらせられた方であるが、その御殿に參上いたして宴を賜はつた日にこの雪をよむやうにとの仰せに奉つた歌である。降る雪の如く髪が白くなるまで大君に仕へまつつたのを顧みると、まことに貴く感じられるといふのである。「貴くもあるか」はまことにこの場合感慨の深い言葉である。ふりしきる雪を見て我が身の老いゆくを思ひ、而も君恩の辱けなさを今更に感じたのである。暢達した調の中に諸兄の忠節の情も見られるやうである。我々日本人はたれしもかういふ心持を以てつかへて居る筈である。不幸にして忠誠の心をいだきながら志をとげずに終るものもある。菅公の如きもこの諸兄に劣らざる忠節の心をいだきながら不幸にして筑紫左遷の身となり恩賜の御衣を捧持して君恩をしのびまつつたのである。それに比べて白髪

になるまで奉仕することの出來た諸兄はまことに幸福である。さうして萬葉集の中にはかういふ忠節の心をうたひ國家に對する愛をうたつた歌が極めて多いのである。大伴家持の歌にもそれが見られる。

家持は武人としての名家大伴家をうけついだ人物であるが若き時は内舍人宮内少輔といふ當時の宮内官になつて宮廷に奉仕し、更に壯年いでて雪深き越中に國司となり、また、中央にかへつては兵部省の役人となつて居る。さういふ間に常に歌をよみ、萬葉集中でも最も多く歌をのこして居るが、極めて純淨な人であり、國を思ひ家を思ふ情の深かつた人物である。さうして天平感寶元年五月十二日に陸奥國より黄金が出たといふ目出たい事がらが起つた時に、當時越中守であつた彼は國家のためにこれをことほいだ歌をよんで居るが、その長歌の中には

海行かば水づく屍、山行かば草むす屍、大君のへにこそ死なめ顧みはせじ　（卷十八）

といふ古歌を引用することによつて彼自らの忠君の情を披瀝して居るが、その反歌としてよんで居るのが次の歌である。

天皇の御代榮えむと東なるみちのく山に金花さく　（卷十八）

歌全體に天皇の御代の榮えをことほぐ國民の心がほとばしつて居る。極めて明るく、清新な表し方の中にその國民としての喜びが目に見えるやうである。

ことに黄金の出たといふ特殊な事柄をよんで居る所にもこの歌の意義があるが、さういふ場合に於ける國家の榮えをことほぐ情がよく感じられるのである。

家持は天平勝寶四年前に述べた橘諸兄の家で次のやうな歌をよんで居る。

天地に足らはし照りて吾が大君敷きませばかも樂しき小里　（卷十九）

吾が大君が天地にみちてりて、しろしめして居られるからこの里も樂しいことであるといふ意味である。諸兄と家持とは歌の交りも深く、互に贈答して居るのであるが、ともに大君に對する忠誠の志をよみかはして居るのは美しい限りである。

さうして諸兄や家持の忠君の情をうたつた是等の歌を見ると、人麿の歌に比して現實的な所

があり現實の國家の上に於て忠君の情、愛國の至誠をうたつて居る場合が多いのである。

これは人麿の活動した藤原時代とは時代も異なつて居る點もあらう。またその性格の相違もあらうが、同時に人麿が宮廷に奉仕した歌人ではあるが、比較的微官で歌を以て奉仕したのに對して、諸兄は文官として家持は武官としてではあるが良き位置にあり、責任も大きかつたのであるから、現實の國家に對する、より大きな關心を有して居た點もあると思ふ。

然し現實の國家を愛し、天皇に仕へまつるにしてもその根柢をなす精神は、天皇は現つ御神であらせられるといふ信念であつたことは言ふまでもない。家持にしても、

すめらぎの神の命
天照す神の御代より

といふやうな神をうたつた場合は相當にあつて、神に對する崇敬の精神の上にたつて、忠君愛國の精神をうたつて居るのである。たゞ現實に於ける忠君の精神、愛國の情をうたつて居る場合がより多いのである。

この點に於て人麿の如きはより傳統的に忠君愛國の情をうたつて居ると見られる。人麿は瀬

戸内海を通つて筑紫へいつたこともあるやうである。

大君の遠の御門とありかよふ島門を見れば神代し思ほゆ　（卷三）

といふ歌は、さういふ場合の歌である。太宰府に役所があつたのを遠の御門といつたのであるが、遠の御門として往復する時に通る海峽を見ると、神代の事が思はれるといふのである。人麿は現實を見てもすぐに神の代を思ひ建國の古をかへりみるのである。さうして國を作られた神の御すゑとしての大君を常に仰ぎ奉るのである。しかし人麿に於ても現實を離れて居つたのではない。傳統的な神の精神、壯大なる高天原の神々の御事柄をうたふその調の中にも現實の大君、現實の國家に對する臣民としての心持が常に見られるのである。そこに古と今と通ずる歴史の流れが感ぜられるのである。諸兄や家持時代に於ては、人麿はすでに世を去つて居り、古典的な歌人として尊ばれたのであらう。しかし兩者の歌をよむ時、互に相通ずるものを認めるのである。神の代をうたふ歌人と現實の國をうたふ歌人と相通ずるものは日本人としての一貫した精神であり道である。このことは萬葉歌人と現代の日本人との間に於ても同様であ

る。萬葉歌人は千數百年前に住んだ歌人である。しかしそれ等の歌人が神を敬ひ、忠君愛國をうたつた情熱は今の我々にもそのまゝに生きて來るのである。現代の我々の心にも人麿は生きて居るのである。憶良や諸兄も生きて居る筈である。古典は單に古にありし文といふのみではなく、今に生きることによつて眞の古典となり得るのである。萬葉歌人の忠君愛國の情を語ることは、今の日本人の心にやどる忠君愛國の情を語ることになるのである。

さうして萬葉集を見ると國を思ひ忠君の情をうたつたのは、人麿や家持のやうな朝廷に直接に奉仕した歌人のみではない。國民全體のひとしくうたつた所である。東國の方から筑紫の防備兵として向つた防人等の歌にもかうした忠君の情は常に見られるのである。彼等は父母をはなれ、妻子と別れて、はる〴〵と筑紫の方へ下つたのである。今日でこそ東國から九州へゆく事などは極めて容易であるが、しかし當時に於てははる〴〵と遠い感じがしたのであらう。されば別れるに際して、妻の繪姿をもつてゆかうとうたふものもあつたのである。しかし大君のためには喜んで出征するのである。國家のためには勇躍してゆくのである。

今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯といでたつ吾れは　（卷二十）

この歌は火長今奉部與曾布といふ防人の歌である。いやしいものではあるが、今日からは一切の顧みもなく大君の御楯として喜んで參るといふのである。かうした情は與曾布に限らずすべての防人の心であつたのである。それは萬葉人の一切の胸にやどつた忠節の情であつたのである。

もとより萬葉時代は大體に於て平和な時代であつたのである。惠美押勝とか道鏡といふやうな惡人も出たが、忽ちにして滅びてしまつたのである。從つて萬葉集には記紀の歌謠に見られるやうな戰爭の歌は殆んど見られない。また近世勤王歌人の歌に見られるやうな烈々たる一死報國の情の燃えるやうな歌も尠いのである。むしろ國家の平安なる時代に國民として、み民として忠節の情をうたつた歌が多いのである。「み民われ生けるしるしあり」といふ歌はそれである。

併しながら一反事あれば一切をすてゝ國家のためにつくし、大君のために身を鴻毛の輕きに比するといふ覺悟は常に有してゐたことは自ら知られるのである。その覺悟を胸の中深くいだいて、而も平和な御代に對して明るくほがらかに忠誠の情をうたひ、愛國の精神を披瀝したの

が萬葉歌人であつたのである。

註

天皇賜酒節度使卿等御歌一首幷短歌

食國の　遠のみかどに　汝等が　かくまかりなば　平らけく　我れは遊ばむ　手抱きて　われはいまさむ　すめらわが　うづの御手もち　かき撫でぞ　ねぎたまふ　打ちなでぞ　ねぎたまふ　歸らむ日　あひのまむ酒ぞ　この豐み酒は

反歌一首

ますらをの行くとふ道ぞおほろかに念ひてゆくなますらをの友（卷六）

四　萬葉集と親子の愛、家の尊重

本節では萬葉集に於ける親子の愛と家の尊重といふことに就いて申上げたいのである。

萬葉集には親が子を思ふ情をうたつた歌があることは前にも申した所である。親が子を思ひ子が親を思ふのは人間の至情である、特に我國のやうな歴史を尊重し、横の關係よりも、縱の關係を尊重することの強い國にとつては、夫婦の愛よりも親子の愛が一層重大となるのである。夫婦の愛も夫婦だけでは完成せず、子どもが加はり、子どもへの愛によつて夫婦の愛が完成されてゆくのであると思ふ。これは個人主義の立場に於ては、十分理解されない點であるかも知れない。しかし日本の如き親から子に傳へ、子から孫に傳へることによつて、家そのものが無限に永續し、發展することに絶大の意義を認める國民性の上からは誠に當然であるのである。かくて親子の愛は個人的の意味よりは家の全體の上に強い根據をもつて居ると思はれるのである。もとよりそのことは親と子とが相互の個性を認めずして、一切の事を家のために、犠牲にするといふのではなく、それ〴〵の個性を認めた上で、而もそれを大きな家といふ無限に永續

する生命の中に融合させるといふ意味である。

萬葉集の中で親子の愛を特に切實にうたつて居るのは山上憶良である。これは憶良の歌が、年齢をとつてからの歌が多いためでもあらうが、また憶良が極めて現實的な歌人であつたためでもあらう。さうしてまた彼が子を愛することの深かつた上に、愛子に死別するといふやうな不幸な經驗があつたために、その情が一層痛切にうたはれたものと思ふのである。

稚(おさ)ければ道ゆきしらじまひはせむしたべの使負ひてとほらせ　（卷五）

この歌は憶良が、我兒古日を失つた時によんだ歌であつて、長歌にも極めて哀切な亡き子を思ふ心持が見えて居るが、この反歌にもさういふ親の愛情が切々として見られるのである。亡き兒はまだ稚ないから、よみぢの道もどう行つていゝか知らないであらう、幣物(へいもつ)をあげるから、よみぢの使よどうか亡き子を脊負つて通つて下さいといふのである。前に申上げた、遣唐使に從つてゆく人の母が天とぶ鶴に、我子をはぐくんでくれとうたつた歌と同じやうに、この歌も想像的なことがらをうたつて居る。しかし稚き子がひとりとぼ〳〵とよみぢの道を泣きながら

歩いてゐはしないかと想像することは、恐らく我子を失つた經驗のある人の誰れしも感ずる眞情であらう。さういつた亡き子への思慕の實感が、そのまゝにうたはれたのがこの歌である。憶良はわが子を失つて「立ちをどり足ずりさけび、伏し仰ぎ胸うちなげ」いて居つても、これが「世の中の道」であると靜かにさびしいあきらめをして居るが、しかしあきらめてもなほ我が子の面影は消える時もなく、よみぢの道をとぼ〳〵歩むその子どもの姿を思ひうかべたのであらう。かつて小泉八雲氏もこの歌をよんで日本にもかくまですぐれた抒情詩があるかと感じたさうであるが、かういふ親子の限りない思慕の情は恐らく何人にも同感されることと思ふ。それは「まこと」の精神が貫いて居るからである。

この歌は我子を失ふといふ悲痛な境涯に於てよまれたのであるが、もう少し一般の場合に於て親子の愛をうたつたのが次の歌である。比較的短い長歌である。

瓜はめば子ども思ほゆ栗はめばましてしぬばゆいづくより來りしものぞ　まなかひにもとなかゝりてやすいしなさぬ

反歌として

白かねもくがねも玉も何せむにまされる寶子にしかめやも　（卷五）

といふ歌がそうて居る。これは餘りに有名な歌であるから委しくは申さぬが、瓜をたべるにつけ、栗をたべるにつけ思ひ出される我子への愛を自らも反省して、子供といふものはどこから來たものであるか、目先きにちらついて、安くねることも出來ないとして、白かねも黃金も玉も我子にまさる寶はないと言つた所に憶良の實感が見られるのみでなく、人間の親子の愛がありのまゝにうたはれて居るのである。

さうして憶良は我子への愛をうたふのみでなく、人の子の親を思ふ心をも推測してうたつて居る。旅に死んだ熊凝といふ少年の心持をよんだ歌はそれである。熊凝は肥前國の人であつたが、天平三年六月十三日十八歳の時にある人に從つて京都へ向けて出發したが、途中病にかゝり安藝國のある驛路に於て死したのである。その時の熊凝の悲痛な心持を麻田陽春といふ人と憶良とがよんだのである。憶良の歌の一首は

出でてゆきし日を數へつゝけふけふと吾をまたすらむ父母らはも　（卷五）

といふのであつて、自分の出發した日から指折り數へながら、今日はかへるか今日はかへるかと父や母は私の任をはたして歸つて來るのを待つてゐるであらうに、自分が死んだと聞いたらどんなに悲むであらうといふのであつて熊凝の心の悲痛さがよく現れて居る、麻田陽春のよんだ歌の一首には人生は朝露の如しとはいひながら、旅にゐて父母にあひたく思ひつゝ死ぬにも死にきれない心持をうたつて同感されるものがある。親と子のつながる緣はかうした歌によつてしみ〴〵と感ぜられるのである。

女歌人としては家持の叔母に當る坂上郎女は、萬葉女歌人の中で最も多くの歌を殘して居る人であるが、相當の年配になつてからの歌も多いためもあつて、親子の情の見られる歌がある。娘の坂上大嬢のためには如何にも母親らしい心遣ひを示して居るが、その女が家持の妻になつた時によんだと思はれる歌は、母としてはじめて感じられる境地である。

玉主に玉はさづけてかつがつも枕と吾はいざ二人ねむ　（卷四）

かつがつは「先づ先づ」とか「まあまあ」とかいふ意味である。安心した中に、流石に感ずるさびしさはまことに母としての眞情であらう。娘に對しては母が責任をもつて保護して居り、その母にそむいて愛人に逢つて母からしかられたといふやうな歌も萬葉集には見えるので、母の娘に對する心づかひは一通りではなかつたと思ふ。それだけに娘が立派に結婚した時の母の安心や喜びは一入であつたと思はれるのである。

また前節にも述べた防人の歌の中に、父母を思ふ子どもの眞情のあふれた歌が多くあるのは注意すべきことと思はれる。

一二首を擧げると

父母も花にもがもや草枕旅は行くともさゝごて行かむ　（卷二十）

「さゝごて行かむ」は「捧げてゆかむ」であるが、旅にゆく場合、父母を花であつてほしい、

さうしたらさゝげて行かうといふのは東の荒武者とも思へないほどのやさしい心情である。

或は出發の忙しさに父母に、十分に別れの言葉も言はないで來たのをくやしく思ふ心持をうたつた歌もあり、筑紫の方から水につかつてゐた美しい白玉をとつて來るまで、父母にも神にいのつて待つてゐて下さいとよんだ歌もあるが、ことに次の一首には切なる感情が見られる。

我が母の袖持ちなでて我が故に泣きし心を忘らえぬかも　（卷二十）

「我がからに」は私の故にである。我が母が袖をなでては遠くゆく私のために泣いてゐた心を、遠くへだてゝゐても忘られないといふのである。母を思ふ眞情が歌の全體の調子の上に現れてすぐれた歌となつて居る。

かくの如くして親は子を思ひ子は親を思ふ、その眞實な情がこれ等によつて見られるのである。それは名ある歌人も名も無き歌人にしても同樣である。

かういふ親子の愛は人間の至情であるが、その根柢に家を重んずるといふ精神があると思ふ。家の永續によつて短き生も永遠になり得るといふ考があると思ふ。かくて孝の精神は親に對す

る養育の恩といふ點もあらうが、またこの家の尊重といふ點が大いに關係して居ると思ふのである。而して特に家族的國家である日本に於ては家を重んじ、孝を盡すことが、國家を愛し、君に忠なる所以になるのである。言ひかへれば國家を愛し、君に忠を盡すといふ精神の上にたつて、はじめて家を重んじ孝をつくすといふことが成りたち得るのである。大伴家持に次のやうな歌がある。

敷島の大和の國に明らけき名に負ふ伴の緒心つとめよ　（卷二十）

この歌には家持の家を尊重する精神が見られるのである。大伴家は前にも申した如く武人の家柄として神代以來國家のために盡して來た家柄である。然るに家持時代に至つて、その家は必ずしも盛んではなかつたのであり、加ふるに一族の間には道をふみ迷ふものもあつたのである。それに對して家持が歴史のある家を思ふの餘りこの歌をよんだのである。

而もこの場合に注目されるのは家を重んずる心がたゞ單なる家としてでなく、大和の國の上から家を見て居ることである。日本の歴史に功績ある大伴家としての責任を感じて居ることで

ある。こゝに家の尊重が忠君の精神と結びつく所があるのである。孝に對しては支那にも多く見られる所である。たゞ支那に於ては孝を百行の基として、忠よりも重んじて居るやうに見られるのであるが、日本に於ては孝は忠を根柢として居ることである。忠孝一本の思想となる所にその特質があると思ふ。日本臣民はすべて國といふ大きな家の一員である。我が家の祖先は、我等の仕ふる大君の御祖先にまします神に奉仕して來たのである。

されば忠にそむいた孝は日本には存しないのである。重盛が父淸盛の不忠を諫言して忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならずと言つたとあるのは、重盛の一時の心持としてならば同感はされるけれども、根本に於て忠と孝とは矛盾して居ないのである。

父の不忠をあくまで諫言して思ひとまらせることが、忠であると同時に孝でもあつたのであるから、重盛は忠の精神を立派に貫いて孝をも行つたと見るべきである。さうして家持が大伴家の家を尊重することの中に孝の精神があるとともにそれによつて忠の精神をも實現しようとしたことが見られるのである。

萬葉集に現れた親子の愛や家の尊重も、この敷島の大和の國といふ根柢の上にたつて考へられるのであり、忠孝一本といふ精神は萬葉集にも貫いて居るのである。

五　萬葉集と自然の愛

前節までで、萬葉集に於ける「まこと」の精神を根柢として、敬神、忠君、愛國の一體となつて居る點、忠孝が一になつて居るといふ點を申し上げたが、次に萬葉集に於ける自然の愛に就いて御話し申上げたいと思ふ。我國の國民性を擧げる場合に自然を愛するといふ點はその一の項目として常に擧げられて居る。私も自然の愛を通して日本精神の一面が知られると思ふのである。

田子の浦ゆうちいでて見ればま白にぞ富士の高根に雪はふりける　（卷三）

これは萬葉集にある山部赤人の富士山をうたつた歌であることは皆さまも御承知の通りである。この歌は小倉百人一首に

田子の浦に打ちいでて見れば白妙の富士の高根に雪はふりつゝ

となつて國民の間に愛誦されて居る。兩者の相違に萬葉時代と新古今時代との歌風の變遷といふものが見られるが、この歌の意義はもとより萬葉集に於て見られるのである。特に「田子の浦ゆ」と進行の意味を現して居ることや「眞白にぞ」と素樸にありのまゝにうたつた所に萬葉的な特質が見られるかと思ふ。赤人のこの歌は富士山をうたつて極めて自然の中によく富士の姿をうつして居るのであつて、富士山の雄大にして而もやさしくまた深みのある姿はこの自然の表現の中に自ら出て居るのである。歐米に於ても、日本を現すのに富士山と櫻といふことが常に言はれて居る。日本の眞の姿は富士山と櫻の花だけで表現されてゐないことは明らかであるが、而もまたこの富士山と櫻の花とが日本をよく現して居ることも事實であるのである。

富士山は日本の自然を最もよく代表して居るのである。雲にそびえたつ富士山の大きさはまことに日本人のますらをの精神をよく現して居るが、然し富士山は大きくして、而も極めて優美な山である。白扇倒にかゝる東海の天とうたはれた如く、まことに富士山位美しい山はないのである。それは日本の優美な自然をよく現して居るのである。而してまた、富士山に曉も

しくは夕ぐれの靜かなる時に白雲のかゝつて居る樣子を見ると、單なる美しさを通りこして幽玄の趣きがあるのである。壯大と優美と幽玄とを併せ有するのが富士山である。それはまた日本の自然そのものの特質でもあるのである。かういふ自然が日本の國民性に與へた影響は大きいのであり、それが日本の文化や藝術の上に常に現れるのである。特に日本の詩歌は日本の自然を離れては考へられないのであつて、古今集以後に於て春夏秋冬は重要な歌の分類となつて居るのである。俳諧の如きは自然や季節を離れては考へられない文藝である。さうして萬葉集に於ても自然は重要なる歌の素材となつて居るのである。

萬葉集に現れた自然にしても種々の方面があるが、一の見方から分けると、雄大なる自然をうたつた歌、優美なる自然をうたつた歌、靜寂なる自然をうたつた歌とに分けられる。雄大なる自然はたとへば富士山の歌に於ても大體雄大なる美であるが、柿本人麿の自然をうたつた歌は殊に雄大なる自然をうたつて力强い氣魄が現れて居る。すでに多くの方々が言はれて居る如く

あしびきの山川の瀨のなるなへに弓月が嶽に雲たちわたる　（卷七）

といふ歌の如きは、さうした雄大なる自然美の現れた歌である。しかし全體から見ると、萬葉集にも雄大なる自然をうたつた歌は人麿の歌の外には多いとは言はれない。さうして萬葉集のみならず、古今集以後になると、雄大なる歌は更に尠くなるのである。これは日本の自然が本來、優美な自然が多いためもあらうし、またさういふ優美な自然から自ら生み出された調和を喜ぶといふ國民性から、大きな自然をも優美化してうたふといふ點もあらう。季節にしても夏や冬の暑さ寒さのきびしい季節は餘りうたはれず、春秋の季節が最も多く歌によまれて居るのもその點から來て居ると思ふ。

かくして萬葉集に於ても優美な自然が多くうたはれるのである。さうして萬葉集の中で自然に對する美意識の見られるのは山部赤人頃からはじまると思はれるが、赤人に於ては優美な自然が多くうたはれたのである。富士山をよんだ歌にしても、富士山を優美化した傾きが多少あるが、殊に和歌浦をよんだ歌の如きにはさういふ優美な自然が見られるのである。かつ赤人は優美な自然を繪のやうにうたつて居る。萬葉集の自然の歌にも自然を繪畫的にうたつた歌と、自然を音樂的にうたつた歌とがある。人麿は自然を音樂的に從つて動的にうたつて居る場

合が多いのであるが、赤人は自然を繪畫的に從つて靜的にうたつて居るのである。人麿の自然の歌が歌の調の上でも、力强い感じがあるに對して、赤人の自然の歌が調の上で優美な感があるのはかういふ方向からも來て居るやうに思ふ。

然しこの壯大な自然にしても優美な自然にしても深く押しつめてゆくと、靜寂な境地が生れて來る。萬葉集の自然の歌もまだ自覺的ではないが、この靜寂幽玄な美に結局は落ちついてゆくやうに思ふのである。

さうして萬葉集の中から靜寂の歌を求めてゆく時に赤人の吉野をうたつた歌等にもさういふ歌が見られるのであるが、萬葉集の皇室歌人の御歌にもさういふ靜寂に徹したすぐれた御歌が多くあるのである。

そのお一人に湯原王があられるのである。

吉野なるなつみの川の川淀に鴨ぞなくなる山かげにして　（卷三）

この御歌は萬葉集の自然の歌でもすぐれた御歌である。なつみの川は吉野川の一部分であつ

て、宮瀧の近くである、水の極めてすんだ清澄そのものゝ感じのする川である。この御歌は吉野のなつみ川の川のよどんで居る所に鴨が鳴いて居る。恰度山かげであるといふのである。この御歌を靜かに誦して見ると自然の靜けさがひし〳〵と感じられるのである。靜かな中にないて居る鴨の聲が却てあたりの靜けさをひきたゝせるのである。かういふ表現は芭蕉の「閑かさや岩にしみ入る蟬の聲」にもそのまゝに見られるのである。日本的自然觀の極致であると思ふ。このことは市原王の次の御歌にも見られる所である。

一つ松幾代かへぬる吹く風の聲のすめるは年深みかも　（卷六）

この御歌は、市原王が天平十六年正月十一日大和の活道岡に上られて年ふりた一つ松をよまれたのである。一つ松は幾代をへたことであらう。その松に吹く風の聲のすみきつて居るのは、長い年月をへたことであらうといふ意味である。前の御歌が感覺の世界から入つて清澄な自然の姿をみつめて居られるに對して、この御歌には感覺をも越えた自然の深さが見られると思ふ。それは自然の深さであるが、この深さまで至ると、それは自然の深さであるか、人生の深さで

あるか、區別することが出來ないのである。幾代か經た一つ松は、人生の幾多の波をきりぬけて來た達人の姿を思はせるのであり、泰然として動かざる姿が目に見えるやうである。萬葉集の自然の歌もかういふ自然の奥深く入つてゆくことによつて人生と一になつてくるのである。人か自然か分らない世界になるのである。自然が人生の象徴となつて居るとも言はれるのである。

さうしてかういふ自然の奥深い所に入つて、そこに生じて來るのは自然に對する暖い愛である。

舒明天皇の御製の

夕されば小倉の山にふす鹿のこよひは鳴かずいねにけらしも　（卷八）

といふ御歌は自然に對する愛がしみ〴〵と感ぜられるのである。夕さればは夕べになるといふ意味である。夕べになると小倉山にふして居る鹿がよくなくのであるが、今晩は鳴かない、もう鹿はねたのであらうかといふ意味である。鹿に對する愛、自然に對する深い愛が感じられるの

であつて、こゝになると、自然と人生との區別はない。人生の愛が自然をつゝんでしまつたのである。自然と人生とが一になつた境地からこの暖い自然の愛が生れて來ると思ふのである。

この自然と人生との一になつた所に生ずる自然の愛といふことを考へる時に、私どもは日本の自然といふことを常に考へるのである。日本人として日本の自然の中に包まれて育つたものには日本の自然こそ最も愛すべきものであらう。少年の時、日夕ながめた故郷の山や川は生涯にわたつて離れないのである。他郷に出る時、他郷で見る自然も故郷の山に結びつけられるのである。自國を出て他國の自然を見る時も、自國の自然を見た眼でこれを見るのは當然であらう。さうして自國の自然に對する愛をより切實に感ずるのである。

この點に於て、柿本人麿の次の歌は興味ふかいものがある。

天ざかる夷の長道ゆ戀ひくれば明石の門より大和島見ゆ　（卷三）

この歌は人麿が九州の方から都へ上つて來た時の歌である。遠い筑紫からの長い道中を、都の方をしたひながら來ると、明石の海峽より大和島が見えるといふのである。大和島といふの

は大和の事をさしたのであらう。即ち筑紫の方から故郷の大和に對する思慕の情が見えるが、同時にこの歌を通して、大和島には日本といふ心持も含めて居ると見られる。大和島といふのも、大和國から日本の國へひろがりゆく心持が見られるのである。そこに人麿に於ては自然を見てもすぐに故郷大和の自然を思ふとともに、日本の自然を思ひうかべるのである。

さうして日本人は國民性として、自然愛の精神が強いといふことは、美しい自然、季節の變化の美しい自然であるために、自然の中に隨順し、自然と調和し一になり得るためであると思ふ。熱帶地方に於ては人間が自然に征服されて居るやうに見られるし、西歐に於ては人間が自然を征服して居るやうに見られる點があるに對して、日本に於ては人間と自然とが調和し、一になつて居るやうに感ずるのである。そこに自然の愛といふことが國民性として現れてくるのであるやうに見られる。萬葉集に於ける自然の歌もまたかくの如き意味に於て、人間と自然とが調和し、一になつて居り、そこに自然に對する愛が見られるのである。

以上萬葉集に現れた種々の日本的特性といふべき點を考へて來たが、この次には萬葉集に於ける和の精神を考へることによつて全體の結びをつけて見たいと思ふ。

六　萬葉集と和の精神

本節では萬葉集に現れた和の精神に就いてのべ、併せて、以上のべた點にしめくゝりをつけて見たいと思ふ。

萬葉集に於ては自然と人生とが調和し一になつて、そこに自然の愛が見られると申した。さうしてこの自然に對する隨順、調和といふことは、單なる山や川といふやうな自然から進んで、自然的なるものに隨順、調和することになると思ふ。人生に於ても、自然的なるもの、即ちあるがまゝのものとあるがまゝのものを理想化するといふ、二の方面があると思ふ。文藝から言へば現實的なるものと、理想的なるものとの二方面である。文藝に於ても、その根柢に於て常に理想があると思ふ。それは人間生活に於ても、理想があるのであらう。理想がある所に進歩があり、發展があると思ふ。理想こそは新しい創造の根源となるものである。たゞこの場合に日本人の理想は現實に、即ち自然的なるものに隨順して居ると見られる。日本文藝もまた常に自然的なるものに隨順し、調和してその理想を實現し、新しい發展をとげて居ると思ふのであ

る。されば日本文藝には單なる現實的なるものはない。常に理想を有して居り、理想主義的な傾向を有するのである。たゞ、しかし日本文藝の理想主義は常に現實的なるもの、自然的なるものに隨順し、調和した理想主義である。この事は日本文藝の古典としての萬葉集に於ても、自然的なるものに隨順してその上に理想を求めて居るのである。自然的なるもの、即ち眞なるものの上にたつて善美を求めて居るのである。即ちそこに「まこと」を中心とした文藝の世界を創造して居るのである。

かくして萬葉集に於ては自然と人生との調和が見られ、從つてまた自然的なるものと、理想的なるものとが調和して居るのである。この自然的なるものと理想的なるものとの調和といふことを考へてゆくと、和の精神が考へられて來ると思ふ。萬葉集の「まこと」といふことも、他の方向から見ると、和の精神と見ることが出來るのである。親子の愛も夫婦の愛もこの和の精神の上にたてられて居るのである。和といふことは、それ〴〵が相互の個性なり心持なりを認め、それ〴〵の本分をつくすことによつて、互に調和し、新しい創造をしてゆくことであると見られる。前に申した萬葉集の歌に妻が旅ゆく夫の徒歩(かち)でゆくのを見るに忍びず、母の形見の品をも惜げなく金にかへて夫に馬買へとすゝめる時に、夫も徒歩をいとはず喜んで妻ともゞ〴〵に歩

いてゆかうといふ心持が起るのである。そこに相互の和があり愛が生ずるのである。

このことは夫婦の間に限らず親子の間、主從の間にも同樣であり、一軒の家の中にも一村一鄕の中に於ても同樣である。一村の中には神主もあり、僧侶もあり、農夫もあり漁夫もあらう。然しそれ〴〵の中に於て各々がそれぞれの分を守りつとめを行ふ所に和が得られる。一家の中に於てもそれ〴〵のものが互の心持を認め分に應じ己がつとめを行ふ所に一家の和が生ずるのである。萬葉集を見てもかういふ和の精神をもとにして得られる、和樂をうたつた歌は多く見られるのである。

新しき年のはじめに思ふどちいむれて居ればうれしくもあるか　（卷十九）

この歌は、天平勝寶五年正月四日に石上宅嗣（やかつぐ）の家に、正月の宴を催した時に主客うたひかはした中の一首であつて、大膳大夫道祖王（ふなどのおほきみ）のよんだ歌である。新しい年のはじめに親しいもの同志が一所になつて居ると、まことにうれしいものであるといふのである。我が國は正月には神を祭り、國民が和樂する風習が特に歐米諸國に比して盛んなやうに見られる。年の始めを眞

に樂むといふ心持が多いやうであるが、萬葉集に於ても新年に上官の家に集つて新年をことほぎ、或は親しきものが集つて酒をのみながら新年をことほいだ歌は多いのであるが、この歌もさういふ場合の歌である。全體の調子の上に如何にも明るいほがらかな氣持があふれてゐて、和樂のさまが感じられるのである。

さうして萬葉人に於ても、上官となり部下となつて互に相和したものが、他に轉ずるに當つて別れる場合もあり、親しきものが遠く旅にゆく折もある。さういつた場合に、平生の和の心持がそのまゝに出て來るのである。萬葉歌人として獨自な個性をもつて注目すべき人に大伴旅人がある。彼は家持の父であるが、長官としては人情に厚く、部下からも慈父の如くしたはれて居たやうである。彼は太宰帥であつたが、彼あることによつて筑紫に萬葉歌人の一の中心地が出來たのである。山上憶良その他の歌人も旅人を中心として集り、歌をよみかはした感があるのである。歌の優劣は別としても憶良は彼よりも位置も低くあつた上に、ほがらかな性格といふ點に於ては旅人に劣つて居たやうである。旅人があつて憶良も思ふまゝに歌をうたふ機會を得たとも見られるやうである。かくの如き旅人が、太宰府から大納言となつて都に上ることになつた時は、筑紫にある人々はこぞつてこの恩情の深い長官旅人の筑紫を去ることを惜し

み、こまやかな歌を送つて居るのである。萬葉集に於てもまれであるほどに旅人に對する同僚や周圍のもの丶送別は切實であつたのである。旅人を蘆城の驛路まで送つて人々がよんだ中から二首を擧げて見ると、一は麻田連陽春のよんだ歌がある。

大和へ君がたつ日の近づけば野にたつ鹿もとよみてぞなく（卷四）

大和の方へあなたの出發されるのが近づくと、人のみではなく、野にすむ鹿も悲しさの餘りなき騷いで居るといふのである。鹿さへもなくといふ所に人々にしたはれた旅人を思ひみることが出來るのである。

また大伴四綱は次のやうな歌をよんで居る。

月夜よし河音さやけしいざこ丶に行くも行かぬも遊びてゆかな（卷四）

月の晩もいゝし、河の音もさやかに聞える。さあこ丶に、別れて都にゆく人も、あとにとゞ

まるものもともに樂しく遊んで別れようといふのである。主從が月夜にさやけき川の音をきいて別れを惜しむといふ內容から言つても、その調子から言つても淸新にして、而もほがらかな心持が見られる。かういふ歌が出來るのも兩者の互の心が暖かく通ふからである。眞實を吐露して兩者の心持が一になつて居るからである。

かういふ歌を見た上で、旅人が筑紫を去つてよんだ歌

こゝにありて筑紫やいづく白雲のたなびく山のかたにしありけり　（卷四）

の境地が分るやうに思ふ。

かういふ和の精神は萬葉集の至る所に見られるのである。君臣の間においても、天皇は臣民の勞苦を心からいたはられ給ひ、臣民も天皇に心から忠節をつくし奉るのである。さういふ間に見られる君民和樂の御歌は聖武天皇の節度使にたまうた御製、持統天皇が志斐嫗に賜うた御製や志斐嫗のこたへ奉つた歌に於ても見られるのである。親と子、姉と弟、その他あらゆる場合に於ける和の精神は至る所に見られるのである。かくして、忠君愛國の精神も、孝の精神も

この和の上にたつて、明るくほがらかに行はれるのである。神に對する信仰も清かに明るく行はれるのである。相互が相和することによつて新しい創造が見られるのである。萬葉集には結びに關する歌が多く見られるが、結びは苔むすといふやうな物の生れる意味であるが、それは紐を結ぶといふ具體的な事がらでもある。松の枝を結ぶといふ民間信仰も、再び逢ふことの出來るといふ信仰の上にたつて居る。結びによつて物が生れるのであるが、この結ぶことの出來るのは互に相和することによつてのみ行はれるのである。和の上にのみ眞の創造があることはこの點から見ても明らかである。

我が國は肇國以來敬神と忠君、愛國との完全なる一致、忠孝一本の精神の上にたつて今日に至つて居ることは繰返し申上げた所である。それは萬葉集に於ても「やすみしゝ我大君神ながら神さびせすと」といふ思想、「大君は神にしませば」といふ信念に於て明らかに言はれて居る所である。さういふ日本國の大理想がまことの精神の上にたち、和の精神によつてむすびとして新たなる創造をつゞけて來たのである。さうしてそれは永遠に新たなる生命として、常若なる國家の生命として發展してやまないのである。それが日本精神の中心をなすものであると思ふ。これこそ日本國家の大理想であり、日本人の常に實現してゆくべき道であるのである。

萬葉集は、かくの如き日本精神が、肇國以來實現されつゝ、今日に至つたその歴史の中のある時期に於ける現れである。千數百年前の古に於ける日本精神の現れである。しかしそれは決して過ぎ去つた古の事實としてあつたのみではなく、それが萬葉集以前も萬葉集以後も、不斷に無限に發展してゆく國家の大理想をそのまゝに現して居る所に常に生きて居るのである。かくして萬葉集に於ける日本精神を顧みることは、現代の日本人の何れにも存する日本精神を反省することである。大和魂を反省し、日本人の永遠にふんでゆくべき道を反省して見ることである。

もとより日本精神は日本人の理想である。萬葉集に現れた日本精神は萬葉人の理想である。從つて萬葉集の中にも日本精神にすべてかなつた歌ばかりとは申されない。時に道をふみはづしたり、或は道をふみはづさうとした場合もないではない。幾千年の國民生活を通じて時には日本人の道をふみはづして不忠となり、不孝の子となつたものもないではない。然しながら幾千年の歴史を通じ、國民生活を通じて根柢に日本精神が貫いて居るために、やがて反省して日本精神にかへつて來るのである。自分の中にある日本精神を時に忘れてしまつてもやがてまたそれを自覺して、それにより所を求めることは、日本の歴史を通じ、日本のすべての文化を通

じ、日本人の生活を通じて見られることである。さうしてかくの如き日本人としてのより所が見られるものが古事記や日本書紀や萬葉集その他の古典である。

萬葉集に現れた日本精神に就いていさゝか願み申上げたのも、日本人のすべてが必ず有して居り、また有して居る筈の大和魂、日本人の道を反省して見たいと思つたからである。

一　眞實なる感動

萬葉集に於ける不滅なるものを考へるためには、文學作品に於ける不滅なるものを考へる根據を先づ考へる必要がある。

文學が不滅であるといふことは、單に古い作品が殘つて居るといふだけではなくて、それが今の我々の心にもふれるものがあつてそこに不滅といふ意義が確立する。萬葉集は幸にしてそのかつて作られた原形にほゞ近いままで殘つて居るのであるが、同時にそれが今の我々の心にそのままふれてくるものがあるのである。恐らくそれは將來に於ても、更に未來永劫に萬葉集はそれを讀む人の心にふれてくるであらう。その時間を超越した人の心にふれるものが文學作品に於ける不滅なるものであると思ふ。もとよりこの場合に文學作品が書物として傳はるといふことも不滅なるものを考へる上に忘れることは出來ない。何となれば文學作品によつて心がふれあふことの出來るのは、常に作品をよむことの體驗の上にたつて居るからである。作品そのものを自ら讀むことなくしては、その作品の生命にふれることは出來ない。かつて萬葉集が

よまれたといふこと、それによつて種々の評價が與へられ、尊重せられて居ることは萬葉集を考へる上に大きな助けとなる。萬葉集の作られた時代の文化形態を明らめることも萬葉集を理解する上に助けとなる。しかしそれはあくまで助けとなるものであつて、萬葉集を自ら讀むことの體驗がなければ、結局萬葉集のまはりをさまよふのにすぎない。從つて如何にすぐれた作品とかつて評價され重じられたにしても、それが現在傳はらない限り、我々はその本質をつかむことは出來ないのである。ここに作品が現在から將來にわたつて傳はつて居るといふことが尠くとも文學作品の不滅といふことの不可缺の條件である。同時にその作品が我々の心にも生きて働きかけるといふことによつて不滅なるものが完成されるのである。さうして萬葉集はかういふ意味に於ける不滅なるものを有して居ると言はれるのである。

更にこの不滅なるものを考へるに當つて、變化するものとの關係に於て考へられねばならない。ある見方からすればすべてのものは變化するといふ。歴史は繰返さないといふ。いふまでもなく現象は流れてやまない。變化の側面だけ考へればものは變化してやまない。しかし花は年々に異なつても年々に咲くといふことには變りはない。そこに變化するものに對して、變化しないものがあるのである。私の今旅窓にながめて居る和歌浦には鶴の姿も見られない。しか

し私は赤人のよんだ和歌浦の歌と同じ美を、眼前の和歌浦の自然に於て感じて居るのである。それは現象の奥にあるものとも言へる。しかしこの現象の奥にある變らざるものがなければならない。萬葉集を生出した時代は今の世と全く同じでない。萬葉集のすべてが今の世に生きて居るといふことは言へないかもしれない。けれども、しかし萬葉集の中にあるものが今も變らずあるといふ方面があることは事實である。我々の心に生きてふれるものは、即ち、萬葉集の中にある不滅なるものであると言つてよいであらう。それは今を中にして、永遠にわたつて不滅なる生命を有するであらう。その不滅なるものは、決して現象からきり離し、存在の根據にたたない觀念的な抽象的なるものではない。現象そのものに即して、もしくは現象の意味として本質として存するものである。

然らば萬葉集に於ける不滅なるものは何であるか。それはすでに折々ふれて來た所であるが、一言にして言へば、それは眞實の感動であり、變らぬ人情である。人の死を悲しみ、人を愛し、自然を美しと感ずる際の眞實なる感動である。「かなし」と「うつくし」「うるはし」もすべては愛する意味となる。同時に愛があればこそ悲しむものであり、美しと感ずるのである。さうして愛は眞實の感動であり、變らぬ人情ともなる。しかしこの場合に眞實の感動とい

つても、表現から離れてあるものではない。形象の背後にあり、もしくは根柢となるものである。さうしてこのことは萬葉集に限らず、すべての不滅なるものにある。ただ萬葉集に於て、他の作品よりも不滅なるものをより多く感ずるといふのは、萬葉集に於て他の作品に比して眞實なる感動がより多く存して居り、それが藝術的形象となつて居るためであらう。

――旅窓にて――

二　萬葉集の歌人

萬葉集の主なる歌人を中心にのべて見たいのであるが、それには先づ詩歌の發生といふ事から御話してゆきたい。文學の發生に就いては種々考へられるが、抒情文學の發生といふ事が先づ考へられるのである。私どもがうれしいと感じ悲しいと思ふ時、思はずうたはれるのがこの抒情文學である。かういふ最初のうたは咏歎的な性質であつて、まだ感情の細い點をうたふとか、外的な事變を精細に觀察するにも至つて居ない。

しかし次第に感情を深めてゆき、また外的事件をも精細に表現し、また自然のすがたをも觀察するやうになる。かういふ點は古事記や日本書紀の歌謠の中にも見られて、たとへば日本武尊が、走水の難にあはれた時、荒浪の中に、身をなげて尊の身代りとなられるに當つて弟橘姫が

さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中（ほなか）に立ちて問ひし君はも

とうたはれた御歌には、單なる咏歎の表現よりも抒情詩的な傾向に向ふ點が見られるし、顯宗天皇の條にある

いなむしろ川ぞひ柳水行けば靡き起き立ち其根は失せず

の歌には川ぞひ柳の、流れてゆく水にゆれなびいて居るやうすをよく見つめて居るのである。かういふやうに記紀の中にも表現が次第に進んでくるし、また始めは歌の音數も句の數も一定しなかつたのが、五七音を主とするに至り、句の數も一定してきて、五句が三十一音の短歌形式や、六句形式の旋頭歌や、また長歌といふものも次第に成立してくるのである。さうしてかういふ點とともに、始めはうたはれた歌謠が專らであつたが、うたはれない詩歌といふものが主になつて來た。かういふうたはれない歌が主となつてきたことが、自然に句の音數などをも一定するやうになり、定型の歌が主になるのである。

さうして萬葉集はかくの如く次第に成立してきた抒情文學としての詩歌が、一先づ完成した所に生れたのである。

萬葉集は大和時代文學の中で純粹な文學としての殆ど唯一のすぐれた作品であるだけに、萬葉集が成立したといふ事は、大和時代文學の始めて完成に達したことを示すのである。從つて大和時代文學の特質として擧げられること、或は眞實性と、直接的な表現とそれに伴ふはりきつた、力强い精神は、やがて萬葉集の特質である。この點が萬葉集の、古今集や新古今集に對して、異なつた高い位置を占めることの出來る理由である。またかういふ點が如何に萬葉集の中に見られるかを考へることが、重要な問題である。さうしてかういふ性質をば私は抒情的精神とよびたいのである。即ちそれが抒情詩の精神である。もとより抒情的といふことは眞實なる感動が中心になつて居るといふことであつて、歌の材料の上から言つて、いつも抒情的方面をのみうたつて居るといふのではない。或は叙事的な事件、たとへば浦島說話の如きもうたつて居るし、また自然の細い觀察をも行つて居る。また同じ主觀的な方面でも神や國家の思想をうたつた歌や、儒教思想や老莊思想をうたつた歌もある。しかし如何なる素材をうたつても、それが抒情的精神によつて統一されて居る所に、萬葉集の精神があり、それ故に萬葉集を全體から見て抒情文學として呼びたいのである。

しかしかうは言つても、萬葉集は大きい歌集である。それは長歌・短歌・旋頭歌合せて「萬葉

集古義」の計算では四千四百九十六首即ち約四千五百首あるのである。從つてその中には純粹でない歌、遊戯的な歌も多いのである。さういふ點から一方では萬葉集の歌を爛熟した文學で、即ち熟しすぎた文學と見る説もあるが、多くの中にさういふ歌があることは事實であつても、萬葉集の歌の全體の性質は純粹な抒情文學であると見られるのである。かつ萬葉集は年代的に見ると、かなり長い間の歌を含んで居る。年代の明らかな歌を見ても、仁德天皇の御代から奈良時代の淳仁天皇の天平寶字三年一月の時の歌まであつて、その間四百數十年にわたつて居る。もつとも萬葉集に歌の多くのつて居るのは、舒明天皇以後であるが、それからだけでも約百三十年ある。かういふ長い間であるから、自然歌にも變化があるのであつて、萬葉集の歌を見るには種々の時期にわけて見ることが必要である。すでに近世の賀茂眞淵なども萬葉集の歌を數期にわけてその間に成長展開の跡を見て居るのである。こゝにもさういふ區分をして見ると、大體舒明天皇以後を萬葉時代としてこれを四期にわけられると思ふ。第一期は舒明天皇以後持統天皇以前であつて、萬葉集の中でも最も素樸な時代である。それだけに記紀の歌謠と同じやうにうたはれた歌も多いらしく、まだ個性的な特色を有した專門歌人の出でない時代である。萬葉集に於ける夜明けの時代である。第二期は持統天皇文武天皇の御代の歌であつて、大

和の藤原に都をせられて居るが、萬葉集の歌がその以前の傳統的なあらゆる要素をとりいれ、更に形式的にほゞ完成した時代である。さうしてすでに專門歌人も現れ、その中に柿本人麿が太陽の如くに輝いて居る。恰度一日の中では活動が始まつてから眞晝頃までに相當する時である。第三期は奈良時代の初期であつて元明天皇、元正天皇から聖武天皇の初めの頃までである。第二期に於て形式的にほゞ完成した歌を、更に內容的に新しい開拓をした時代である。歌人として山部赤人や、大伴旅人、山上憶良や高橋蟲麿らの輩出した時代である。一日の中で正午から午後三時頃までに相當する時期である。第四期は聖武天皇の御代、即ち奈良時代の中期に當る時期であつて、第三期まででほゞ萬葉的なるものを完成せしめた後をうけて、新しい發展をするよりはそれまでのものを回顧する時期に入つて居る。そこに感傷的な性質が多くなり、爛熟的性質も加はつて居る、大伴家持はこの時期を代表する歌人である。一日の中では太陽が西の方に傾いてやがて日が地平線にかげをかくすまでの時期である。かういふやうに四期にわけて見る時、萬葉集の中にも、希望にもえた朝と晝間の活動時代と、夕暮れとがあるのであり、そこに素樸と完成と爛熟とがあるのであるが、なほそれは全體として晝の時代であつて、夜の時代はないのである。明るい太陽を中心として動いて居て、闇の夜もなく、青白い月光の夜も

ないのである。そこに萬葉集の全體としての明るい特質があると思ふのである。

さて次にかういふ萬葉集の各時期を代表するやうな歌人に就いてのべて見たい。

第一期は一人をとり出して擧げるやうな歌人はなく、むしろ民衆歌人といふべきであつて、名もない東女（あづまをとめ）の純情をうたつた歌や地方の人々の間にすぐれた歌を見出すのであり、萬葉集の歌の中での素樸の歌に屬するのである。さうして個性的な歌人としては第二期の人麿を先づ擧げたい。

人麿は一言でいふと大きな歌人である。それに萬葉集の中で最も大きい歌人であるばかりでなく、和歌史の上でもたしかに大きな歌人である。而もこの大きいといふ事は、歌の數が多いとか、長歌を多く歌つたといふやうな點のみにあるのではなくして、彼の歌の全體として有する性質にあると思ふ。人麿はかくの如く大きい歌人であるとともに、彼は生活を格調化した、もしくは生活を韻律化した歌人である。彼の歌には素材のまゝを歌つた歌はなくして、どこまでもそれが韻律化され、格調化されて居り、而もその韻律も格調も決して生活を遊離したものではないのである。さうして大和文學時代に於て古事記を中心として見られる國家的な精神が萬葉集に至り、次第に個性的な自覺の現れてくるその過程を示す歌人として注意すべき位置を

占めて居ると見られる。そこに人麿は古事記以來の傳統的な國民的精神を繼承して、それを歌として表現するとともに、その中から個性的な抒情的精神を展開せしめて居るのである。即ち恐らく人麿の若い時代の歌を多く含んで居ると思はれる人麿家集の歌に於ては、力強い情熱中心となつて居て、自然を題材として壯大な美となつて居る。

たとへば有名な

足引の山川の瀬のなるなへに弓月がたけに雲たちわたる（卷七）

は人麿歌集にある歌であり、恐らく人麿の歌として差支ないと思はれるが、この歌を見ても、題材に於て雄大なるのみならず、雄大な自然を觀照し表現する際の力強い氣魄精神が言外に現れて居るのである。この精神は一方の抒情的生活にも現れて、戀愛に於ける力強い表現となつたのである。さうして後期の人麿に於ては多少消極的になつたのであるが、かゝる強い情熱は一生を通じて力強い人生愛の精神となつて現れて居る。殊に宮仕をするやうになつてから、從來の純粹な併し單純な題材とちがつて、民族的思想や精神を取りいれるに至り、國家的精神を

中心とする作品が歌はれるに至つて居る。さういふ歌を見ると多くは天皇や皇太子の行幸啓に供奉し奉つた時の歌や、皇太子皇女の薨去をいたみ奉る歌としてよまれて居るが、その間に神や國家に對する思想觀念が扱はれてゐるのである。即ち神話や祝詞に見られるやうな精神がよまれてゐるのである。かくの如く神の思想が多くよまれて居るが、それは自然神的な神よりも、人格神的神であり又國家的な人格神である。神を中心とした國家建設の神話がその素材として用ゐられる。さういふ國家的人格神に對しては、山や川の神も仕へまつるのであつて、一切がこの國家的な神を中心として仕へまつるのである。

山川もよりて奉れる神ながら、たぎつ河内に舟出せすかも（卷一）

大君は神にしませば、天雲の雷の上に廬せすかも（卷三）

の歌にも見られる。かういふ意味の思想的素材が豐富に用ゐられたのは、彼が長歌を多くよんだといふ點もあり、又彼が宮廷歌人としてのためもあらうが、同時に人麿が傳統的な神や國家の精神を中心して、教養され、成長したのを見るのであつて、人麿の素質として傳統的國家的

精神が刻みつけられて居たのである。

かゝる民族的精神を取りいれると共に漸く完成してきた人麿の心境は、若い時代のやうに唯奔放に情熱的に進むよりは、それを反省する所から後期に於ける消極的傾向も生れ出たのであるが、併しさういふ間にも死を悲しみ、別れた悲嘆や思慕をうたふ事によつて、人生の愛を表現してゐるのである。そこに人生に對する細かな觀照と、廣くなつた視野とは、複雜な多方面な世界を歌に見出すやうになつてきたのである。さうして彼が情熱的な相聞歌人であつたことと、熱烈な愛國歌人であつたこととは矛盾するものではない。何れにも強い人生の愛が根柢となつて居るのであつて、その愛の擴大であり發展であるに過ぎない。さうしてさういふ思想や題材を表現するに當つて、人麿が常にそれを格調化し、又は音樂的に表現することは、人麿の歌の特色であり、人麿のすぐれた音の技巧や枕詞や、序の豐富なかつ清新な用ゐ方によつても見られる。

さゝの葉はみ山もさやにさやげどもわれは妹思ふわかれきぬれば（卷二）

の歌に見える「さ」の音を巧みにくり返して用ゐた所にも、人麿の韻律詩人としての特色は見られるのである。從つて人麿は自然をうたつても赤人のやうに平面的に表現するよりは、彼の主觀を中心として、律動的に或は音樂的に表現されて居るのである。ことに彼のもつ壯大美の表現は神や國家に對する强い愛の精神と相まつて彼の歌人としての特質をなして居る。

かやうな意味で人麿は詩歌發生から發達してきた所のすべての要素をとりいれ、それ以前の傳統的精神を統一し、短歌・長歌・旋頭歌をすべてうたふとともに表現上の技巧をもほゞ完成して、抒情詩としての第一の成立を實現せしめたのであつて、人麿のもつ大きさ、それは實質的にも歴史的にも大きな意義が見られるのである。

さうして人麿に於て綜合的に完成された萬葉集の歌が、更に種々の方面に分れて、その各方面をそれぞれ分擔して新しい開拓をなしたのが第三期の歌人である。

第三期の歌人としての赤人と旅人、憶良及び蟲麿を見ると、人麿によつて綜合せられたものを、それぞれ分化せしめて居る。これを歌體から見ると、赤人と旅人とは短歌を主として居り、憶良と蟲麿とは長歌を主として居る。また歌の題材から見ると赤人は自然を主としてうたつて居り、そこに自然詩人、叙景歌人と言ふことが出來、旅人と憶良とは人生を主としてうたつて居

る所に人生詩人といふ事が出來る。さうして同じ人生的方面をうたつても、旅人は主として老莊的な人生態度を有し、現實にしがみついてその上にしつかり立つといふよりは、享樂的な心持が見られるに對して、憶良の方は儒教的な立場といふべき傾向のもとに、現實の上にあくまで立脚するといふ所に異なつて居るのである。さうして蟲麿は傳說を多くうたつて居り、傳說歌人、もしくは叙事的歌人としての特質を有して居る。さうしてかく一方面に集中するとともに、それぞれに個性的な開拓をなして居るのである。

赤人を見ると、四十九首の歌が殆どすべて自然の歌であるが、さういふ自然をうたふのに、自己を離れて、即ち沒主觀的に自然をうたつて居る事は、赤人の特質である。殊に赤人に於て注意せられる點は、自然の美に對する一の標準が出來てきたことである。即ち自然の優美なやさしさといふものを、自然美の中心とするやうな考が起つてきたことである。前にも自然美を壯美、優美、靜寂美とに分けたが、日本人が自然美をはじめて自覺したのは、やはり優美であつたやうである。さうして平安時代に於てはこの優美が自然美の中心となつたのであつて、かういふ優美感が次第に固定する所から平安時代の後期頃になつて靜寂美といふものも自覺されてきたが、なほ優美は傳統的な自然美感としてながくつゞいて居る。さういふ優美を主とした

自然の見方は赤人などからはじまると見てもいゝかと思はれる。

わかの浦にしほみちくれば潟をなみあしべをさしてたづなきわたる（卷六）

の如きはさういふ點をよく示して居る。しほのみちてくる潟を、なきわたる田鶴は、優美な自然である。すみれつむ野を、なつかしんだ心持とともに、優美の自然がそれを流れて居る。さうして赤人は、一方には寂寞たる吉野の山の中にきこえる鳥の聲に耳を傾けたり、水草の生へしげつて居る古の古き池をじつとみつめて居る所に、靜寂美の現れさへもみられるがかういふ所に自然美に對する傳統的觀念として存するものが、先づ赤人によつて、自覺されてきたことを見るのである。赤人の自然の歌が、自然歌人として、更に成長してゆくべきものを含んで居る事は事實であるが、日本に於て初めての自然歌人といふべき位置を占める事は明らかであると思ふ。

次に人生歌人としての旅人と憶良とを見ると、旅人の方は名家大伴家に生れ、人としてもほがらかな明るい、物に拘泥しない性格のやうであるが、この點が歌にも現れて輕快なほがらか

な點が見られる。彼が短歌を主としたのもそれであるが、有名な讃酒歌の中に、人生の空しきをといて酒を讃美して居るし、また

この世にし樂しくあらば來む世には蟲にも鳥にもわれはなりなむ（卷三）

といふ歌の如く現實的刹那的傾向をうたつて居るが、しかし彼の歌には全體にほがらかな味があつて、悲痛な心持は見られないのである。むしろ酒をのんでほがらかな心持になつて、かういふ歌を即興的によんだのでもあらう。從つて彼の歌は人生觀として、さう深い根據のあるものではなく、むしろ漢學に深かつた旅人が知識的にうたつたに過ぎないと思ふ。全體としてほがらかな明るい彼の性格が、そのまゝ歌に現れたものと思ふ。しかしかういふ特色のある題材をうたつて淡々たる中にすぐれた表現をなして居る所に、彼の歌人としての意義も存するのである。旅人に對して、憶良の方は若くして支那にもゆき、老齢に至るまで九州の國司として任にあつたが、その病がちな身體のためもあらうが、沈鬱な、現實に執着する性格は、歌の上にも現れて居る。現實の上に存する老病貧といふやうな苦しみを常にうたつて居るが、しかし

現實に生きて居る以上は、出來るだけの事をなすべきをうたふのである。そこに現實に於ける子供への愛、功名への愛をうたつて居るのである。彼が子供に對する愛をうたひ、子供の古日の死を悲んだ歌にはそれが見られるのであつて、

瓜はめば子供思ほゆ栗はめばましてしぬばゆいづくより來りしものぞまなかひにもとなかゝりてやすいしなさぬ（卷五）

瓜をたべると子供のことが思はれる、栗をたべるとまして子供のことが忍ばれる、どこから子供はきたものであらうか、いたづらにめさきにちらついて安らかに眠ることも出來ない、といふ歌には、瓜や栗をとり出して子供を思ひ出した邊り極めて具體的で眞實感にあふれて居る。彼は宴會に出ても、家の妻や子を思ひ、外國へ參つても故國を思つてやまなかつたのであり、病あつきに及んでも

をのこやも空しかるべき萬世にかたりつぐべき名は立てずして（卷六）

とあくまで現實の上に生きようとする精神が見られるのである。時に理智に流れて、表現が散文的になつた場合があるが、なほ全體としての着實な現實愛の詩人として高い位置を占めるのである。

かういふ旅人や憶良に對して、蟲麿は傳說歌人として新しい方面を開拓して居る。もつとも蟲麿の歌と明記してあるのは、萬葉集の中で藤原宇合が天平四年に西海道の節度使に遣はされる時、よんだ長歌と反歌とがあるのみであるが、蟲麿歌集の歌としてある歌は、作風の上から見ても蟲麿の歌と思はれて、その中に多くの傳說歌があるのである。萬葉集の傳說歌は純粹の叙事的といふよりは、抒情的精神によつて統一されて居るが、しかし蟲麿が浦島をうたひ、眞間手兒名その他の傳說をうたふのに、事件を精細にかつ具體的に叙して居る手腕はすぐれて居て、そこには彼獨自の特質を有して居るのである。

かういふやうに第三期の歌人に於て、人麿によつて綜合せられた各方面を、更に分化して、その各方面に新しい展開を示したのである。その意味で人麿時代とともに萬葉集の最も全盛の時代であるが、更に第四期はかういふやうに分化し、開拓せられた歌が、も一度集成されたの

であるが、もはや萬葉的なるものとしては新しい展開が困難であり、それ以前を集成して回顧するに止つたのである。さうして多少の展開を示したものも、すでに萬葉的なるものの成長といふよりは、後の古今的なるもの、もしくは王朝文學的なものの萠芽であつたのである。かういふ第四期の特質をそのまゝに表して居るのが、大伴家持である。

家持は第三期の旅人の子であり、萬葉集を蒐集整理する上で最も多くの力をそゝいだ歌人である。その點で萬葉歌人の中で最も多くの歌を殘して居り、またその生涯の經歷も比較的明瞭である。さうして彼の人麿のやうな、天才的な歌人でなかつただけにその生涯はむしろ人間性の成長の歴史であり、歌としての成長の跡もよく見られるのである。即ち第一期は青年時代であり、宮内官としての花やかな生活が歌の上にも現れて、多くの女歌人との贈答歌を殘して居る。それは短歌が多く感傷的な線の細い歌ではあるが、若き日の純粹なものが見られる。第二期は家持が雪の深い越中の國に赴任した時代で、やうやく反省期に入つた彼は多くの試練の歌を作つて居る。北越の自然をも多くうたつて居るが、一方に歌才の乏しかつた彼は、長歌を歌ひこなすだけの力にも乏しく、人麿や憶良の歌の詞を模倣する所が多くて、失敗の歌が多いのである。さうして第三期に於て彼は再び都に上つて兵部省の役人になるが、やうやく彼自身

の獨自な歌境を完成した感がある。自然に對しても清澄な域に至り、人生に對しても彼獨自の風格を出して居る。殊に大伴家の一族として、その家に對する愛が見られ、この點が人麿以來流れて居る國家的精神と結びついて雄渾な歌をなして居る。

わが宿のいさゝむら竹ふく風の音のかそけきこの夕かも（卷十九）

といふ歌にはかそかな竹の葉ずれの音に耳をかたむけて居る清澄な自然觀が見られるし、

敷島のやまとの國にあきらけき名におふとものを心つとめよ（卷二十）

には國事と家とに對する愛を調和させて、その上に建設されるべきものをうたつて居るのである。かういふやうにして家持の歌を通して、成長されてゆくものが見られるが、それは萬葉集に於ける成立と展開の跡をかへりみて、回顧し反省するとともに、やがて平安時代に流れてゆくものを示して居るのである。

以上の如く主なる歌人を中心として、考へたが、萬葉歌人としては、この外にも極めて多くの歌人があり、またすぐれた女歌人も多く見られるのである。しかしこゝに記した數人の歌人は萬葉的なるものを最もよく代表し、ことにその成長展開の各時期をよく示して居る點で注意せられるのである。さうしてかういふ各歌人の個性の大きさを認めるとともになほ個性を超越して存する萬葉的なるものをそこに認めるのである。それは眞實なるものを、直接に表現する所からくる力强さとはりきつた精神とである。それは萬葉集の本質であるとともに、大和時代文學の本質でもあると考へられる。

三　柿本人麿の歌

天離る夷の長道ゆ戀ひくれば明石の門より倭島見ゆ

萬葉集の卷三にある柿本人麿の羇旅歌である。原文は

天離夷之長道從戀來者自明門倭島所見

とある。原文から訓ずるとすれば、この外には訓じ得ないのである。たゞこの歌には「一本云」として「家門當見由」とある。即ちこれによれば第五句は「やどのあたり見ゆ」となるのである。これは意味から言へばどちらでも通ずるから、何れが誤とも言はれず、歌はれる場合に變化を見たのであらう。この歌が愛誦されて、かういふ變化が生じたとも見られるし、作者にしても一本のやうな心持を感じて、この一句を更に加へたとも見られる。所謂佛足石歌碑體

歌の形式であつたかも知れないが、この羇旅の一聯には六句となつた歌はこの外には見られないから、六句形式ではなく、第五句の變化と見る方が正しいであらう。さうして一本の方が改作であり、變化であつて本文のやうに「倭島見ゆ」といふのが原作であらう。人麿の歌としても「倭島見ゆ」とあつてはじめてこの歌の大きさが生じて來るのである。なほ訓の上でも從來の諸説では第二句の「夷之長道從」を「ひなのながぢを」と訓じてゐた場合があつたが、契沖が「ひなのながぢゆ」と訓じてからは、それに從つて居るやうであり、それは正しいのである。また「戀來者」を類聚古集や神田本萬葉集には「こぎくれば」と訓じてあるが、これは本文に忠實でない訓であつて從ふことは出來ない。一本の方でも「家門當見由」の門を「乃」の誤ではないかといふ説が契沖の萬葉代匠記によつてとなへられて居る。さうして「いへのあたりみゆ」と訓ずるのである。岸本由豆流は家門のまゝで「いへのあたりみゆ」と訓じて居る。古く神田本萬葉集もこの一本を「かどのあたりみゆ」と訓じて居るやうに諸説諸訓があるのであるが、現在では原文のまゝに從つて「やどのあたりみゆ」と訓じておくことにする。

本來この歌は旅の歌として愛誦されたことは卷十五にも

安麻射可流比奈乃奈我道乎孤悲久禮婆安可思能門欲里伊敞乃安多里見由（三六〇八）

といふ歌があつて

あまざかるひなの長道をこひくればあかしのとより家のあたり見ゆ

と訓ぜられる。卷十五の方でも

柿本人麿　歌曰　夜麻等思麻見由

と註が加へてあり、この註に近くある數首は「當所誦詠古歌」とあつて、新羅へ使する人々が愛誦したものと思はれるのである。その間に自然に文句が少しづつ變つていつたことはこれを見ても明らかである。が、原作は恐らく、

天離る夷の長道を戀ひくれば明石の門より倭島見ゆ

と見るべきであらう。

語釋としては特に難語は無い。「天ざかる」は夷の枕詞であつて、「夷」に接續するのは遠く離れて居る田舍といふ意であらうが、直接には天ざかる日といふにかゝると見る說がある。さうすると地上から天遠く離れて居る日といふことになるが、それよりも天ざかるは空間的な距離をさすと見て夷にかゝると見ておいてもよいであらう。また夷は筑紫の方から歸つて來たのであるから筑紫の方をさしたのであらうし、それに關して倭島は日本全體をさすのでもなく、また本州全體をさすのでもなく、大和地方をいつたのであらう。瀨戸內海を航して來て明石海峽から大和の方が見えて來たのを言つたのである。さうすると島といふのが不合理のやうでもあるが、明石海峽の方から見た大和を島と感じたことも有り得るし、また結局は本州といふ大きな島の一部分でもあるから、島といふこともあり得るのである。「夷の長道ゆ」は筑紫から明石海峽までの長い道程をさしたものである。夷の長道とあるが、夷にある長道でなくとも、夷からの長道であると見てよい。筑紫路といふのが筑紫にある道でなくとも筑紫からの道中である

と見てよいのと同様である。もとより一方に大和路、信濃路といふやうな場合、大和の中の道中であり、信濃の中の道をさしたと思はれる場合もあるが、萬葉集では兩方を併用して居るやうである。こゝは夷からの長い道と解すべきであらう。「ゆ」は進行の意を示して居る。その點で「夷の長道を」とは異なつて居る。山部赤人の「田兒の浦ゆ打ちいでて見れば眞白にぞ富士の高嶺に雪はふりける」の「田兒の浦ゆ」を「田兒の浦に」と同様に、解する説もあるが、「田兒の浦に」とすれば位置が定まつてしまふに對して、「田兒の浦ゆ」は田兒の浦から打ち出るといふ動的意味が入つて來るのであつて、兩者の相違があると見たいのであるが、それと同様である。「戀ひ來れば」は古訓に「こぎ來れば」ともあるが、「戀ひ來れば」で十分意味は通ずるのである。

一首の意味は「遠い田舍からの長い道中を故郷の方をしたひながら來ると明石海峽から待ちこがれた倭が見える」といふのである。これを反對に筑紫の方へゆく時の歌と解することはもとより出來ないのである。

この歌は歌としては極めて平明であるが、筑紫の方から都の方を待ちこがれて居る時の眞情が卒直によくうたはれて居る。その眞情は何時の場合にも起る眞情である。この歌の境地は新

羅に使する場合にも同感されたために船出の際にうたつたのであらう。倭島といふことは大和の事をうたつたのであるが、海の外から日本のことをうたつた場合としてもふさはしいほどに生きて用ゐられて居る。人麿が特に倭島といつたのは日本といふことを意識しないで用ゐたのであらうが、自ら人麿の國家意識が現れて居るのである。萬葉歌人の中でも特に神や國家の思想を強く抱いて居る人麿が自ら倭島とうたつたのであらう。同時にこの歌で注目されるのは表現が極めて韻律的であり、音樂的であることである。人麿の歌はどういふ場合の歌でも極めて音樂的であることは妻と石見から別れて來た時の歌

さゝの葉はみ山もさやにさやげども吾は妹思ふ別れ來ぬれば（卷二）

によつて知られるが、羇旅の歌でもそれが著しく感じられる。かつて私は同じ人麿の羇旅の歌

珠藻刈る　敏馬をすぎて　夏草の　野島が崎に舟近づきぬ（卷三）

を擧げて單に二の地名を擧げただけで舟の進行するさまが自ら感じられるといふことを言つたことがある。またさういふ人麿の歌が音樂的な感じを與へる理由として母音を多く用ゐること、s音やm音等の流麗な音を用ゐることの多いためとしたことがある。この事は後の研究家によつて一層精細に實證されて居るのであるが、この「天離る」の歌にしても第一句と第四句のはじめに「あ」音が用ゐられて居り、s音やm音やn音も用ゐられ、清澄なk音も用ゐられて居るのである。人麿はたしかに音樂型の感覺を豐富に有してゐたであらう。これに對して敍景詩人山部赤人の歌にはかういふ流動的な歌が尠く、音樂的な歌が尠い。むしろ繪畫的な歌人であると思ふ。高市黑人は人麿に近い音樂型の敍景詩人であることは「櫻田へ田鶴なきわたるあゆち潟潮ひにけらしたづなきわたる」の歌によつても推測されるのである。

本來すぐれた詩歌は音樂的世界と繪畫的世界とを超えた世界にあるであらう。一度觀念の世界に入つて、そこから出て來る情調の世界にある歌であらう。それは感覺と觀念とをつゝんで、その中に、あふれ出る情調の世界にある歌であらう、さういふ點から言へば「天離る」の歌などはその點にまで十分入つてゐない。こゝにこの歌が人麿の歌の中でも最高の境地にまで入つてゐないと言ふことが言へる。尠くとも人麿の歌の中にはこの歌よりも深く入つた歌があると

言ふことは言へる。しかしこの歌も人麿の歌の中ではすぐれた歌であることは明らかであり、人麿的なるものを相當に實現して居ると言はれるであらう。さうして人麿の歌として特にこの歌を擧げていさゝか考察したのは、遙かな旅から日本の美しい島が見えて來た時、私の心に忽ち浮んで來たのはこの歌であつたからである。「倭島見ゆ」は日本思慕の情の自然の發露として私にも強く同感されたからである。

四　山上憶良の歌

わかければ道ゆきしらじまひはせむしたべの使負ひてとほらせ

この歌は萬葉集卷五にある山上憶良の亡兒古日を悲む長歌の反歌である。原形は

和可家禮婆道行之良士末比波世武之多敝乃使於比豆登保良世

とあつて、一字一音式の表記法をもち、文句にも疑問が無いので本文批評としては問題のない歌である。歌の意味は子供が稚くして死んだので冥土の道をどうゆくかも知らないであらう。それが親として心配でならない。よみぢの使にまひなひをやるから、どうぞ稚きわが子を背負つてよみぢの道を通つてくださいといふのである。「まひ」といふのは所謂幣物であつて、現實的な言葉であるが、それを冥土の使にやるといつた所に、その現實的なものが極めて超現

實的なるものとなるのである。まして亡き子を冥土の使に背負つて通つてくれといふのは極めて空想的であるやうにさへ見られる。

しかしこの空想的な言ひ方にとらはれて、この歌の中を貫く實感をつかむことの出來ないものは、この歌を解したものとは言はれない。極めて空想的な題材の中に脈々と波うつのは親の亡き子をいたむ切々の情ではないか。私はこの歌を古から愛してゐた。この歌の長歌と併せて山上憶良の最もすぐれた歌であると考へてゐた。私事を語つてすまないが、私がはじめて萬葉集を講じた頃に子供を失つたので、この歌は私の心を極めて強くうつた。それから十餘年をすぎて、西歐へゆく船の中で、萬葉集の恰度憶良のことなどを書いて居る頃に再び子供を失つたのである。子供の死のことを聞いたのはそれから暫く後ではあつたが、とにかく憶良のこの歌が私の心に一層切々としてせまつて來たのは明らかである。私はこの歌を幾たび誦したことであらう。さうしてしみ〴〵として亡き子供への思慕に心うたれたのである。人は死んでどうなるかを考へる時、この世の足跡はいつまでも殘るであらうけれども、肉體を離れた靈がどうなるかといふことはよく分らない。肉體の死とともに靈魂のはたらきもそのまゝ消滅するのではないかとも考へられるが、それでは餘りにさびしい心持もする。たとへ意識は無くともその靈

がこの世にとゞまり、或は冥土にいつて大宇宙の生命の一となるであらうことは欲求としてさう信じたいのである。わけて稚き子のこの世に殘した足跡は極めて小さくさゝやかなものである。死ぬ間際にも人形と繪日傘とをほしがるほどの稚けなさで、この現實に於て知つた人も少く、僅かに父と母との胸に生きるほどに過ぎないであらう。その亡き靈はせめて極樂にいつて樂しくあつてほしい。もう一度その靈が生れ變つて來てほしいと考へられるのである。

しかしさう考へる時、もし子の靈が生きて冥土にゆくならば、どんなに遠い道をさびしく歩いてゐることであらう。どう歩いていゝか分らなくて道を迷つてゐはしないかと氣遣はれる。この世でしる人も少かつた稚き子はあの世の道でもひとりぼつちで歩いてゐるのではなからうか。この世に居る時、少しでも母親がゐないと寂しがつた子供は、冥土の道でもどんなに寂しがつてゐることであらう。泣きながら、とぼ〳〵歩いてゐるのではなからうか。それに冥土の使が親切であればよいがもし意地惡くてひつぱたきでもしてはゐないだらうか。

さう思へば、よみぢの使にまひをやらうといふ心持も起る。さうしてせめて親切に冥土の使が導いてくれることをいのりたい。これが親心である。この親心をこんなに切實にうたつてくれたのは憶良の子を失つた悲みの實感がほとばしつて居るからである。私もこの歌の心を二度

繰返して體驗した。さうして憶良と同じ心で、亡き子のよみぢの道安かれといのる心から、したべの使にまひをせむといふ心持さへ同感されるのである。まひはせむといふ現實的な事柄をとらへたのは現實詩人、人生詩人としての憶良らしい。さうしてそれを空想的な事柄と結びつけながら切實な現實感をひし〳〵と感じさせるのは憶良なればこそである。

二句で切つて、三句で切る、この句切の用法といひ、簡潔で力强く言ひきつて無限の寂寥と愛惜感とをたゝへて居る所に、今も生きて居る、年月を越えて、生きる永遠なるものをこゝに感ずる。萬葉集は古くさいといふ人はこの歌をしづかに誦してもらひたい。古くして、而も刻々に生きる古典の命をこゝに切實に感ずることこそ、眞に古典をよむことである。

五　萬葉集の季節感と年中行事

一

年中行事は平安時代に至つて盛んになつたのであるが、上代に於ても多少の萌芽は見られるのである。萬葉集に於てこれ等が如何に見られるかは、一應檢討して見ることが必要である。さうしてかゝる年中行事は季節の推移によつて生ずるのであるから、萬葉集の季節感を考へながらこの點にふれて見たい。

季節感の中心となるものは春夏秋冬の推移であるが、この四季に就いては春と秋とを美的により多く尊重することは同樣であるが、しかし平安時代に比して萬葉人が夏や冬にも相當美的に關心を有して居ることを見るのである。これは四季の歌の數の比例から見ても、古今集の四季の歌では春と秋とが非常に多いのに對して、夏冬の歌は極めて尠いのであるが、萬葉集では古今集以下の如く四季の部立が明瞭ではないが、卷八の如き雜歌・相聞に分け、更に春雜歌・春相聞の如くに分けて居るものに就いて見ると卷八では、

春雜歌　三十首　　春相聞　十七首　（四十七首）
夏雜歌　三十三首　　夏相聞　十三首　（四十六首）
秋雜歌　百五首　　秋相聞　三十首　（百三十五首）
冬雜歌　十九首　　冬相聞　九首　（二十八首）

卷十で見ると、

春雜歌　七十八首　　春相聞　四十七首　（百二十五首）
夏雜歌　四十二首　　夏相聞　十七首　（五十九首）
秋雜歌　二百四十三首　　秋相聞　七十三首　（三百十六首）
冬雜歌　二十一首　　冬相聞　十八首　（三十九首）

の如く、秋が最も多く冬は最も尠いが、しかし卷八では春と夏とは殆ど同數である。かつ古今集ほど差が著しくない。かういふ數量的のみならず、內容的にも古今の夏は、靑葉の夏、卯花の咲き、時鳥のなく夏であり、冬も雪を花と見る構想を主とした歌である。萬葉集に於てもその傾向はすでに多いのであるが、しかし中には冬の歌には卷八の初めに舍人娘子の

大口の眞神の原にふる雪はいたくなふりそ家もあらなくに

卷十には

六月の地さへさけて照る日にも吾が袖ひめや君にあはずして

の如きがある。ともあれ、季節感としては春と秋とに中心をおいて居り、自然美にしても春と秋とに重きをおいて居ることは明らかであるが、これを十二月の上から見ると、どの月に重きがおかれるかといふ點は注意される。四季と月との組合せは一月二月三月が春で、四月から夏であることは卯花をうたつた歌が夏に入つて居る事からもしられる。

ほとゝぎす來鳴きとよもす卯の花の共にや來しとはましものを（卷八）

卯の花もいまだ咲かねばほとゝぎす佐保の山邊に來なきとよもす（卷八）

從つて一月は春の初めであるが、年中行事の上から見て、平安時代では一月が最も行事の多い月であるが、萬葉集の一月の歌には如何なる行事が見られるか。先づ一月といふ事の明瞭な歌がどの位あるか。卷の順序で見てゆくと、

第一、天平二年正月十三日太宰府の旅人の家に行はれた梅の宴の歌（卷五）

第二、神龜四年春正月諸王諸臣等に勅して授刀寮に散禁せしめらるゝ時作れる歌――これは神龜四年正月數王子及諸臣子等春日野に集ひて打毬の樂を作した。忽に天陰り、雨ふり雷電した。この時宮中に侍從もゐなかつたので罰に行ひ、授刀寮に散禁して妄に出ることを禁じたので、作つた歌といふ、反歌に

梅柳過ぐらく惜しみ佐保の内に遊びしことを宮もとどろに（卷六）

これによつて正月に打毬の樂のあつた事が分る。

第三、天平九年正月門部王のもとで、集つて、宴をした門部王の歌には

あらかじめ君來ますと知らませば門に屋戸にも珠しかましを

とある。

第四、天平十六年正月五日安倍蟲麿の家に集ひて宴せる歌

吾がやどの君松の樹にふる雪の行きにはゆかじまちにし待たむ（卷六）

第五、天平十六年正月十一日一株の松の下にてうたげした歌、市原王

一つ松幾代かへぬる吹く風の聲のすめるは年深みかも（卷六）

第六、天平十八年正月白雪の日、橘諸兄以下、太上天皇の所に伺候し酒をたまはつた時の歌

ふる雪の白髪までに大君につかへまつれば尊くもあるか（橘諸兄）

新しき年のはじめにとよのとししるしとならし雪のふれるは（その他三首）（卷十七）

第七、天平二十年正月二十九日大伴家持うたふ歌四首（卷十七）

第八、天平勝寶二年正月二日國廳で饗を諸郡司等にたまふ時の歌

あしびきの山のこぬれのほよとりてかざしつらくはちとせほぐとぞ（家持）（卷十八）

第九、天平勝寶二年正月五日家持の歌

むつきたつ春のはじめにかくしつゝあひしるみてばときじけめやも（卷十八）

第十、天平勝寶三年正月二日守館で宴をした、雪が多くつもつたので、主人家持のうたつた歌

新しき年のはじめはいや年に雪ふみならし常かくにもが（卷十九）

第十一、天平勝寶三年正月三日內藏忌寸繩麿の館で宴樂した時の歌

ふる雪を腰になづみて參りこし印もあるか年のはじめに（卷十九）

第十二、天平勝寶五年正月四日石上宅嗣の家で宴歌した場合の歌

新しき年のはじめに思ふどちいむれて居ればうれしくもあるか（卷十九）

第十三、天平勝寶五年正月十一日大雪一尺二寸積む、その時の歌

みそのふの竹の林に鶯はしばなきにしを雪はふりつゝ（卷十九）

第十四、天平勝寶五年正月十二日内侍に侍して千鳥のなくをきく、その時の歌

かはすにも雪はふれれし宮のうちに千鳥なくらしゐる所なみ（卷十九）

第十五、天平勝寶六年正月四日家持の宅に集つてよんだ歌

霜の上にあられたばしりいやましにあれはまゐこむ年の緒ながく（卷二十）

第十六、天平勝寶六年正月七日天皇、太上天皇、皇太后、東常宮南大殿にて肆宴したまふ歌

いなみ野のあからがしはは時はあれど君をあがもふ時はさねなし（卷二十）

第十七、天平寶字二年正月三日内裏の東屋垣下に侍し、玉箒を賜ひ肆宴す、應詔歌を作り詩を賦す時の歌

初春のはつねの今日の玉箒手にとるからにゆらぐ玉の緒（卷二十）

第十八、天平寶字二年一月七日侍宴す、但仁王會の事のために六日に召さる、その時の歌

うちなびく春ともしるく鶯はうゑ木のこまをなきわたらなむ（卷二十）

第十九、天平寶字三年正月一日因幡國廳で饗を國司にたまふ時の歌

新しき年のはじめの初春の今日ふる雪のいやしけよごと（卷二十）

これによると正月の記載の見えるのは十九所あり、

卷　五　一　所（正月十三日）

卷　六　四　所（正月、正月、正月五日、正月十一日）

卷十七　二　所（正月、正月二十九日）

卷十八　二　所（正月二日、正月五日）

卷十九　五　所（正月二日、正月三日、正月四日、正月十一日、正月十二日）

卷二十　五　所（正月四日、正月七日、正月三日、一月六日（仁王會のため七日のを代へて居る）、正月一日）

となる。又、

一　日　一所　二　日　二所　三　日　二所　四　日　二所

五　日　二所　六　日　一所　七　日　一所　十一日　二所

十二日　一所　十三日　一所　二十九日　一所

となる。但し、一日二日は地方廳が多く、都では三日・五日・七日が多い。多くは宴會であるが、時節では雪の日に行はれた場合が多く、梅の宴もある。更に、日は記してないが、春の野の打毬があり、天皇から玉帚をたまふ宴がある。七日にあるべきを仁王會のために六日になつた場合がある。

以上のやうで一月の年中行事としては萬葉集だけでは一日から五日まで及び七日等の日に宴を行ふといふ行事が行はれたことは知られるのであつて、梅花宴、打毬會等があることもあるが、一月には七日頃までは萬葉歌人も宴會を行つて、酒をのみ歌をよんで和樂したといふことが知られるのである。

二

次に萬葉集に現れた二月と三月の歌に就いて季節感と年中行事とを見ると、季節感の見られる歌は相當にあるが、年中行事といふべきものを見うる歌はまだ殆ど見られない。平安時代になると種々生じた行事殊に三月三日の雛祭に關する歌も見られないのである。もつとも「雛遊すも」といふ事は記紀の歌には見えるが、これも三月の三日に限られてゐず、雛節句とは異な

るのである。從つてこゝでは季節感といふ點を主として見たい。

萬葉集に見られる二月三月の歌は相當にあるが、二月三月と明記されて居て季節感を現して居る歌は萬葉集の中期までの歌では尠く、家持時代の歌が最も多い。こゝにも季節感が萬葉歌人に強い關心をもたれたのは萬葉集でも遲れて居ると見られるのである。

さうして萬葉集に見られる二月は春の盛りとして考へられ、花の歌が多く、三月に於ても花が多くうたはれるが花の種類が異なり、晩春としてうたはれるのである。たとへば大伴家持には二月三月と明記した歌が多く見られるが、彼の自然觀照の歌として最もすぐれて居る

春の野に霞たなびきうらがなしこの夕かげにうぐひす鳴くも（卷十九）

わがやどのいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも（同上）

は、天平勝寶五年二月二十三日の作であり、

うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも獨しおもへば（卷十九）

は、二月二十五日の歌である。前の歌には「うぐひす」がよまれて居るが、その歌の與へる情趣は春の盛りを思はせるのであり、後の歌は殊に春の盛りを思はせる。

左註にも「春日遲々として鶯(ひばり)正に啼く、情調の意、歌に非ずば撥ひ難し」とあるのである。家持が天平十九年二月二十一日によんだ

世間はかずなきものか春花の散りのまがひに死ぬべきおもへば（卷十七）

の如きには、晩春の感じさへ伴つて居るのである。さうして家持と大伴池主とが三月の三日、四日、五日にわたつて贈答した歌の序を見ると、

上巳名辰、暮春麗景、桃花照嶮以分紅、柳色含苔而競綠（卷十七）

とあり、

餘春媚日宜二怡賞一上巳風光足二覽遊一（卷二）

といふ詩の句も見られるのである。

かくて萬葉集の二月三月は今日の陽曆に於ける三月四月に相應することは明らかであるが、是等二月三月の歌に如何なる鳥や花がうたはれて居るかを見ると、

二月ではたとへば

春の野に霞たなびきうら悲しこの夕かげに鶯なくも（卷十九）

うららうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも獨しおもへば（同上）

青柳の秀つ枝よぢとりかづらくは君が屋戸にし千年ほぐとぞ（同上）

君が往もし久ならば梅柳誰とともにか吾がかづらかむ（同上）

龍田山見つゝ越え來し櫻花ちりか過ぎなむ我がかへるとに（卷二十）

等が見られる。

三月では

春の花くれなゐにほふ桃の花した照る道にいでたつ嬬嬬（卷十九）

吾が園の李の花か庭にちるはだれのいまだ殘りたるかも（同上）

春の日に張れる柳を取りもちて見れば京の大路おもほゆ（卷十九）

もののふの八十のをとめがくみまがふ寺井の上の堅香子の花（同上）

今日の爲と思ひてしめしあしひきの峯の上の櫻かく咲きにけり（同上）

奥山の八峯の榛つばらかに今日はくらさね丈夫のとも（同上）

山吹は撫でつゝおほさむ在りつゝも君來ましつゝかざしたりけり（卷二十）

燕くる時になりぬと雁がねはくに思ひつゝ雲隱りなく（卷十九）

等がある。その他千鳥や雉等の歌もある。

かういふ月によつて鳴きもしくは咲く花も場所によつて異なつた點もあるのである。卷十七に、「立夏四月既に累日をふれどもしかもなほ未だ霍公鳥のなくを聞かず、因りて作れる悲の歌」として、

あしひきの山も近きをほと〻ぎす月立つまでに何か來なかぬ

とうたつて居り、四月の歌に「霍公鳥は立夏の日來鳴くこと必定まれり、又越中の風土橙橘のあること希なり」ともあるのである。かういふやうにして季節に應じてそれ〴〵の花や鳥が注目され、待たれるのであつて、それに相違する場合には物たらなく思ふのである。これは家持時代に於て季節感が著しくなつたことを示すものである。

次に二月三月の花の中で、何の花が最も多くうたはれるかを見るに、萬葉集に見られる梅をうたつた場合をしらべると、百十八所ある。たゞしこの中梅枝もしくは桃樹とあるのが、數ケ所あつて、梅は花のみならず樹をも愛好されたことが見られるが、櫻に比して梅が愛賞された

ことが知られるのである。しかし櫻も梅についで重んじられ三十七首ほど詠まれて居る。同じく二月三月の花としてうたはれる椿にしても五所しかないのであり、柳にしても十八所、山吹が十七所しかないのであるから、梅が最も多く、それについで櫻が多くよまれたのである。さうして梅は季節から言へば一月と二月とであつて、旅人の九州に於ける梅花宴は正月十三日であり、二月には散る梅をうたつた場合も多い。たとへば卷二十、天平寶字二年二月の歌には、

怨めしく君はもあるか宿の梅の散りすぐるまで見しめずありける

見むといはゞ否といはめや梅の花散りすぐるまで君がきまさぬ

の如きでも知られる。これに對して櫻の方は二月、又は三月である。二月の例では、卷二十の家持が龍田山の櫻を惜んだ、

龍田山みつゝこえこし櫻花ちりかすぎなむわがかへるとね

は二月十七日の作であり、三月五日に池主が家持と唱和した長歌に

山びには櫻花ちり

とある。しかし卷十八にある

櫻花今ぞさかりと人はいへどわれはさぶしも君としあらねば

は三月の歌かと見られるのであり、而もさかりとある。さうして櫻が梅についで咲く事は卷五の正月の梅花の宴にも

梅の花さきてちりなば櫻ばなつぎてさくべくなりにてあらずや

とある事によつても知られる。以上の如く二月三月の花の中では梅と櫻が多いが、萬葉集では遙かに梅の方が多いといふ事は注目されるのである。さうして正月に於ての行事としては酒宴

が多かつたが、二月三月では梅・櫻等の花を見る事に、主なる行事があつたと思はれる。

三

次に萬葉集に於ける七夕の歌を中心として、夏から秋への季節感と行事とを考へて見たい。萬葉集に於ける夏には前にもあげた如く「六月の地さへさけて照る日にも吾が袖ひめや君にあはずして」の如き歌もあるけれども、しかし大部分は卯花や橘や楝・あやめ草・藤の花等の植物と、時鳥その他呼子鳥やまれには鶯等の動物との交渉によつて生ずる初夏の自然の姿がうたはれて居る。しかし「ひぐらし」の歌は多少見られて、

もだもあらむ時も鳴かなむ晩蟬のものもふ時になきつゝもとな（卷十）

ひぐらしは時と鳴けども物戀に手弱女われは定まらず泣く（卷十）

の如き歌があり

野べ見ればなでしこの花咲きにけり吾が待つ秋は近づくらしも（卷十）

の如く、なでしこによつて晩夏をうたつた歌も見られるのである。なでしこは憶良の秋の七草の中にもよまれて秋の花となつて居るが、晩夏にも咲いたものと見られうるのである。また卷十七にある天平十六年四月五日に家持のうたつた、

杜つばた衣にすりつけ丈夫のきそひ狩する月は來にけり

の如きは夏に於て狩獵の行はれる季節の行事的なものを感ぜられるのである。

ほと〻ぎす待てどきなかずあやめ草玉に貫く日をいまだ遠みか（卷八）

の如きはあやめの節句を思はせるものがある。しかし全體として夏の行事とすべき歌は極めて尠く、雨の歌はあつても五月雨を感じさせる歌は殆ど見られないのであり、夕立の歌も見られない。

次に、秋の歌としては、數も多いだけに夏に比して多方面にわたつて季節感が見られるので

ある。動物としては鹿や雁が多く植物としては萩・女郎花をはじめ秋の七草もすでに定められ

萩が花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝がほの花（巻八）

の如きがある。さうして春の花に對して紅葉に對する歌が多く、秋の自然美の中心をなして居る。春秋の爭はすでに萬葉集にも見られるのである。さうして時雨の雨が屢々うたはれて居るのであつて、

雨ごもり情いぶせみ出で見れば春日の山は色づきにけり（巻八）

をはじめ、雨の歌は多い。時雨や秋の雨その他、雨に關する歌は秋が最も多いと思ふ。

さうして秋の行事としては七夕の歌が注目されるのである。七夕の歌は萬葉集にも極めて多く見られるのであつて、秋の歌の重要な要素となつて居ることは後の勅撰集にもひきつゞいて見られる所である。この七夕は牽牛星、織女星といふ星が七月七日にあふといふ星說話である

が、支那から傳來した、説話であることは明らかである。もつとも「天なるやおとたなばたのうながせる」といふ歌も見え、天服織女といふ名は記紀にも見えるが、星神ではなく、これは七夕説話の主要な要素をなしてゐない。星に關する説話は一體に尠いのである。星神としても「かがせを」といふ星は惡神となつて居るのである。萬葉集には

天の海に雲の波立ち月の船星の林にこぎかへるみゆ（卷七）

の如きもあるが、星の歌は一帶に尠いのに外來説話である七夕の歌のみが何故に多くうたはれたかといふ事は、興味深い點である。第一は萬葉時代に於ける異國情緒に對する讃美といふ事があげられる。憶良旅人等が傳統思想を中心とするとしても儒佛老莊思想等の外來思想を多くうたつて居るのも、この時代の外來文化謳歌のためである。七夕もやはりそれと同じ理由を有する。

第二に、七夕の歌は星説話を通じて人間世界の戀愛をうたふ心持があるからであらう。換言すれば七夕に寄せて戀愛感情をうたふのである。かういふ點はたとへば時鳥や鹿の聲によつて

妻を戀ふ聲をあらはし、女郎花によつて女性を擬人化するのと同様である。七夕を擬人化するためである。第三は織女星によつて機を織るといふ女性のすぐれた點を示して居るのである。そのために支那に於ても乞巧奠として重んぜられたのであるが、日本に於ても、これによつて女性の技能の上達を現し、それをこひねがふ民間信仰的な意味があつたのである。七夕が民間信仰となつたことがこれを多くうたふにいたつた理由であらう。天服織女も關係があると思はれる。

君に逢はず久しき時ゆ織る機の白たへ衣垢つくまでに（卷十）

棚機の五百機立てて織る布の秋さり衣誰かとりみむ（同上）

の如きも機を織るといふ事を現して居るのである。

さうして日本の民間説話として女性が機を織る事のすぐれたために吉福を得た説話は多いのであつてかういふ點が七夕説話を愛好した一の理由であらう。

そこに、第四として七夕説話は本來外來説話であり、異國情緒を重んずるために多くよまれ

たと同時に、それが長くよまれたのは、日本の民間信仰化された、或は日本的性質が極めて多い事がこの説話を愛好せしめた大きな理由となつたと思はれるのである。「あめなるやおとたなばた」のやうな日本的な神と結びつく事によつて日本化したのは後の大黒に於けると同様であらう。

四

最後に萬葉集の冬の歌に就いて一言しておきたい。冬といふのは十月・十一月・十二月であるが、冬の歌としては萬葉集にも多くない、卷八や卷十の四季の分類を見ても數は最も尠く夏よりもすくないのであつて、春・秋に比して季節に對して感ずる美感も大きくなかつたと言へる。さうして冬の歌で多くうたはれたものを見ると、雪の歌が最も多い。たとへば卷十の冬雜歌二十一首の中で雪をうたつた歌が十四首ある。冬の相聞では十八首の中、十三首ある。約三分の二は雪の歌と見られるのである。卷八でも冬雜歌十九首の中、十四首、冬相聞にも九首の中、五首あるのであつて雪は冬歌に於て最も多いのである。是等の中には淡雪といふのが相當にあり、はだれ雪も見えるのである。淡雪の場合には

沫雪に降らえて咲ける梅の花君がり遣らばよそへてむかも（巻八）

沫雪のこの頃つぎてかく降れば梅の初花ちりか過ぎなむ（巻八）

の如く梅の花と併せて多くうたはれて居る所を見ると、春に近い頃の歌と見られるのである。さうして雪を花にたとへる如き場合は古今集ほど著しくないのであるが、やはり見られるのであつて、

わが庭の冬木の上にふる雪を梅の花かとうち見つるかも（巻八）

の如きがある。たゞこの場合にも古今集の貫之の落花をば空に知られぬ雪がふるといふやうな理智的解釋はなく極めて自然にうたはれて居るのである。同時に梅の花を雪と見た歌も冬の歌の中にあるのである。

わが岳に盛にさける梅の花殘れる雪をまかへつるかも（巻八）

の如きはそれである。

さうして萬葉集の冬の歌を見ると雪の外に霜や霰の歌もあり、こゝには冬のさむさをうたつた歌も見られるのである。

霰ふりいたも風吹き寒き夜や旗野にこよひわがひとりねむ（卷十）

の如きは冬の寒さがよく現れて居るが、憶良の貧窮問答の初めの「風まじり雨降る夜の雨まじり雪ふる夜は」の如き冬の寒さをよく現して居る。かういふ點は古今集以後に於ては殆ど見られなかつた所と思ふ。

なほ冬の行事としては年の暮の行事がある筈であるが、たとへば卷二十の十二月十八日の大監物三形王の花の宴の歌三首を見ると主人三形王が

み雪ふる冬は今日のみ鶯の鳴かむ春べは明日にしあるらし

とうたはれ、客の家持は

あら玉の年ゆきかへり春立たばまづ我が宿に鶯はなけ

とよみ、同じく客の伊香眞人は

うちなびく春を近みかぬば玉の今夜の月夜かすみたるらむ

とよんで居る。冬を雪によつて現し、春を鶯によつてあらはして居る思想が見られる。しかし年末に宴をした歌は見られないのであつて、一月に比して、宴は尠かつたと見られるのであり、特に年末の行事が美感を與へる點は尠かつたと思ふ。

以上、四季にわたつて季節感ならびに行事を少しく考へてきたが、萬葉集に於ては古今集以後のやうに四季に關する區分は尠いやうであるが、後期に至るに從つて四季に對する意識が高まつてきた。さうして家持に至つては年月の記載を忠實に行つてゐるだけに、季節感が著しい

と思はれる。たゞ萬葉集だけではその季節感によつて生ずる行事といふものは未だ多く行はれない。尠くとも萬葉集ではまだ多く扱はれてゐないと見るべきである。

六　東歌に關して

東歌に關して少しく書いて見たいが、もとよりまとまつた研究ではない。東歌に關して二三の感想をのべるに過ぎない。

第一に東歌は何をさすかといふ點を述べたい、東歌はもとより歴史的な名稱であるから歴史的に定められた意味を考へなければならない。內容としては東の歌であり大體關東地方の歌をさすのであるが、この關東地方の範圍といつても種々考へられるべき點がある。また東歌といはれるものは萬葉集卷十四の東歌をさして居るが、古今集の二十の卷にも東歌がある。さうして名稱は異なつて居るが、平安時代の地方歌謠である催馬樂や風俗歌とは如何なる關係にあるであらうか。また平安以後にもある東國民謠は如何なる狀態にあるか。こんな點を考へてゆくと東歌の意味だけでも無限に問題がひろがつてゆくのである。

東歌といはれる範圍を見ると、萬葉集では東は陸奥にわたつて居るが、數多いのは常陸から

上野、下野の邊りまでであつて、下總、上總から武藏をへて相模、伊豆に至り西は駿河、遠江に至つて居る。それに信濃の歌も相當にあつて、合せて十二國にわたつて居る。とにかくこれだけの範圍にわたつて居るが、たゞ西の方では遠江までを東といつたかといふに古今集卷二十の東歌では陸奥、相模、常陸の外に甲斐と伊勢歌とがある。甲斐を含んで居るのは萬葉集と異なるが、萬葉集には信濃の歌があるのであるから甲斐を含めることも無理でない。しかし伊勢國の歌があることはいろ〳〵考へられるべき點がある。

古今集にある伊勢歌は「をふの浦に片え差覆ひなる梨のなりもならずもねて語らはむ」の一首であるが古今集ではこの歌についで冬の加茂の祭の歌があるから伊勢の歌も、東歌としての自覺のもとに收めたのではないとも見られるが、しかし伊勢を東國の中に入れた例は古今集のみに限らない。即ち風俗歌にも伊勢歌があるのである。風俗歌を東歌と見ることには說明を要するのであるが、催馬樂と風俗歌とは何れも地方民謠であると見られるがどういふ相違があるかといふに、兩者の歌のよまれた地名を調べて見ると、催馬樂は近畿を中心として中國にわたつた歌が多く風俗歌は東國地方の歌が多いので、やはり風俗歌は平安時代の東歌と見られるのである。(これに就いては萬葉集考說の中に調査報告を出しておいた。)さうしてかういふ風俗歌の

中に伊勢歌があるのであるから、尠くとも平安時代には伊勢も東の中に含まれてゐたと見たい。

勿論これに就いては種々の解釋も出來る。古今集の記載はやゝ曖昧な點があり、風俗歌は初めから東といふ言葉は見えないのであるから、これから東歌の範圍を見ることはやゝ不穩當であるとも言へる。たゞ伊勢を東歌に入れることは一の理はあるのである。即ち逢坂關の東を關東とする考は平安時代のやうな京都中心の時代ではあり得べきことである。萬葉時代に遠江以東を東國と考へられたのが、平安時代に於てかく擴大されたと考へられれば、都と地方との考へ方の相違として興味深い。現在では關東といへば箱根の東とも考へられようが、さうすると一層東といふものの考へ方の推移が見られるわけである。しかし今日方言の分布の上から見ると三河の邊が東西の區劃の堺をなして居るやうであつて、遠江の邊を堺とした萬葉人の考へ方は妥當な點が多いであらう。

さうして萬葉集卷十四の東歌の中には未勘國とする歌と、國の明記してある歌とあるが、國の明記してある中で、最も多いのは上野國の二十五首であり、相模國十五首、常陸國十二首、武藏國九首、等が多い方である。信濃國のは五首ある。常陸國や相模、武藏等が多いのは首肯せられるが上野國が最も多いのは多少意外の感がある。常陸國は常陸風土記によつても知られ

る如く古代にはかなり開けてゐたと思はれるが、上野國は如何なる理由であらうか。上野國の歌を見ると伊香保に關する歌が多い。

上野ぬ伊香保のねろに、ふろ雪のゆきすぎがてぬ妹が家のあたり

の如きその例である。伊香保は現在は溫泉があり、古くから伊香保の湯のことは見える。宗祇等もこゝに湯治にきて居る。萬葉集では伊香保の溫泉のことはうたはれてゐないが、その頃も伊香保の邊りの自然が愛賞されたことは明らかで、その爲に上野國の歌が多くなつたであらう。萬葉集には紀溫泉即ち今の湯崎や「足がりの土肥の河内にいづる湯」とある湯河原の溫泉等見え、風土記には更に方々の溫泉が見えるのであるから、伊香保の溫泉のことがあるならばうたはれる筈であるが、この點は見られない。ともあれ伊香保が注意されて居ることは事實であり、この他日本武尊の御歌にもゆかりある碓井の山も萬葉集の方に見え、古碑のある多胡もうたはれて居るのであつて、上野國も相當に古くから注目すべき土地であつたのであらう。上野國の東歌だけを解した橋本直香の上野國歌解は眞淵の遠江國歌の解と合せて、東歌の特殊研究とし

て注目されるが、上野國が東歌の中では異彩を放つて居ることは注目される。

二

次に東歌の作者に關して少しく考へたい。東歌が大體作者未詳の歌であることはいふまでもない。たゞ東歌の中に柿本人麿集の歌があるのであるが、これに對して人麿集の歌が何故東歌に入つたかといふことが考へられる。人麿歌集は私見によれば大部分は人麿の若き時代の歌であり、それに多少人麿との問答歌としての女性の歌や周圍の歌が入つて居ると思はれるが、さうすると東歌にある人麿歌集の歌も人麿の歌か、でなくとも人麿に何かの關係のある歌といふことになる。尠くとも東の人ではなく都の人の作といふことになる。人麿歌集出とある歌を見ると、たとへば

上野ぬいならの沼のおほの草よそに見しよは今こそまされ

あひ見てはちとせやいぬるいなをかもあれや然もふ君まちがてに

あり衣のさゑさゑしづみ家のいもにものいはずきにて思ひ苦しも

の如きそれである。かういふ歌を見ると東の耕人の歌らしくない都人の歌であり、また人麿周圍の歌、進んでは人麿の歌と見ても差支は起らないのである。然らば東歌に人麿歌集の歌が何故に入つて居るかといふに、東人の歌が都の方にうたはれて、それが人麿歌集に書きとめられたと見るよりは、人麿の歌が傳誦され、それが東の方にもうたはれたと見た方がよくはないか。一體に人麿の歌には本文の異同が多いのは、うたはれたために自ら相違が起つたのではないかと思ふ。人麿の歌がうたはれる事によつて東の方にも傳はり、東歌の蒐集家に書きとめられたと見ることは決して不合理でない、私はさう解したいのである。現に「あり衣のさゐさゐしづみ」の歌は卷四の人麿歌とある「珠衣のさゐさゐ沈み家の妹にものいはず來て思ひかねつも」と非常に近いのである。

かういふやうに東歌の中には東人の歌以外に都人の歌のあることは認められるが、然らば都人の歌は東歌の中にどれほど入つて居るのであらうか。これに就いては都人の歌が非常に多く入つて居ると見る說と、やはり大部分は東國人の歌と見る說とがある。前者は武田祐吉氏のとられる說であつて東歌の中に地名のよみこんである歌は大部分都人の作であらうといふ。その理由は東人は自分の近くの親しい山や地名を歌によみこむ筈はない。地名をよみこむのはその

土地を始めて見た都人の歌であらうとするのである。これも一の推測である。旅人がその珍らしい土地を歌によみこまうとすることはあり得ることである。しかし同時に日夕見なれた山や川や土地の名を歌によみこむこともあり得ないことではない。心理としてはいづれもあり得ると思ふ。さうすればこの地名のことは直接作者を都人か東人か定める理由とはなり得ないといふことになる。

わがせこを大和へやりて待つしたす足柄山の杉の木の間か

にしても地名はよみこんであるが、それだけでは都人か東人かを區別せられないと思ふ。さうして東歌の中に用ゐられて居る方言や感情内容等から見て、相當に東人の歌が多いのではないかと思はれる。東人の純眞な經驗がうたはれて居る場合が多くこれによつて素朴な地方人の精神生活を知り得るのである。

なほ個々の歌の作者と關聯して、萬葉集の東歌を含んで居る十四の卷は誰れが選したものかといふ點が起る。防人歌を含んで居る卷二十は家持の蒐錄であるといふことには異論がないが、

卷十四に就いてはなほ定説がないのである。たゞ從來の説を見ると大伴家持が主として蒐集整理したものとする考、高橋蟲麿を蒐集者とする考、蒐録者未詳とする考等がある。家持が最後の整理をしたといふことは言へるにしても、蒐集家といふことはなほ疑問がある。東歌の蒐集家は東國に旅行し、相當に長く滯在したものと見る方が自然であるが、家持は東國に旅行したことも、東の方に官吏として赴任したことも明證がない。この點が大きな疑問である。これに對しては蟲麿の方は常陸に赴任してゐたことは事實であり、常陸風土記も蟲麿の手が入つてゐないかと私は推測するので、蟲麿を東歌の蒐集家とすることは家持よりも蓋然性が多いと思ふ。しかしそれにしても最後の整理は蟲麿ではなかつたであらうし、又蒐集家といふことにも明證はなく推測に止る。その點から言へば未詳と見るのが無難であるが、なほ蟲麿等が東歌の一部の素材を作つたといふことは推測していゝかも知れない。さうして上野の伊香保の歌が多いことなどは何か蒐録者を考へさせるものがある。

それから卷十四の成つた年代に就いて山田博士が卷十四に武藏を東海道に編入されてある所から、このことの行はれた寶龜二年十月以後に卷十四が成立したといふ所見を出された。これは興味ある説であるが、現存の卷十四に於てはこのことは言はれるが、他の卷と同じく十四も

種々の變改整理が行はれたと推されるから、素材としての卷十四が成つたのはもつと早かつたと見たいのである。

三

東歌の基礎的な問題の一二を考へたから、次に多少の批評的な言葉をのべて、結びとしたい。東歌が萬葉集の中で特殊の歌であることはいふまでもないが、東歌が何故に人をひきつけるかといふに、一にその地方の人の純樸な感動が卒直に現れて居る所にあると思ふ。巧みな歌を作らうと思はない。心のまことをそのままにうたひ出したといふ所に特質があるのである。これはいつも變ることなき歌の本道である。どんなよき歌もこゝから出發しないものはない。しかし次第に不自然な技巧とか心づかひが加はつてこの純なものが蔽らされがちであるが、東歌はさういふ點がなく、純樸のまゝの姿で現れて居る。もとより東歌は前に考へたやうに都會人の歌もあり、また作爲の加はつた歌をはじめ、不純な歌もないではないが、全體としての性質はやはり純樸な點にある、たとへば

にほどりのかつしかわせをにへすともその悲しきをとにたてめやも

稻つけばかかるあが手を今宵もか殿のわくごがとりてなげかむ

の如きには、夫を思ふ田舍乙女の純情が卒直にうたはれて居る所に人の心をうつものがある。この純樸は感情をも卒直に表現するとともに、自然や周圍に對しても、極めて眞實な見方をする。東歌の特質はもとより抒情歌にあらうが、その序の如きには自然觀照に徹した表現が見られる。

あが面のわすれむしだは國はふりねにたつ雲を見つゝしぬばむ

の如き、專門歌人をも凌ぐものがある。「垣ごしに麥はむ駒のはつはつに」「はたすゝきうら野の山に月かたよるも」の如き如何に自然や周圍を見つめて居るかさうして一方には洒脫な心境と表現とを有して居る歌もあることは

乎久佐壯丁と乎具佐助丁と潮ぶねのならべて見れば乎具佐勝ちめり

といふ歌や

からすとふおほをそ鳥のまさでにも來まさぬ君を子ろ來とぞなく

の如きによつて知られる。これ等の歌は果して東人の歌であるかどうかは疑問があらうが然し恐らく東人の作と見てよからう。さうして

面白き野をばな燒きそ古草に新草まじり生ひば生ふるがに

といふ歌は春にかけて野の草をやくのを歌つたのであらうが、さういふ實景から何かしら人生の眞の姿が見られる樣である。かういふ歌の中には素樸な東人のつかみ得た人生觀を思はせるものがある。また東歌に占に關する歌や民間信仰に關する歌が相當にある事も注意せられる。前に擧げた「葛飾早稻をにへすとも」の歌や「夕占にも今宵とのらろ」とある歌、その他占に

關する歌は多いが「誰ぞこのやの戸おそぶるにふなみに我が背をやりていはふこの戸を」の如きは女性の信仰を通しての強い心情が見える。やはり地方生活に於ても生業にいそしみ、享樂を味ふ中にも信仰が中心となつて居るのが見られる。その他東歌を通して地方生活の諸相が見られるのであつて歌の世界と純樸な地方生活とが一つになつてゐる事がわかる。

尙東歌が言語的に見ても東國方言を多く含んで居る事は其の大きな特色である。これ等の方言は音韻の轉化といふ事が主であつて「ふる雪」を「ふろよき」といふ如き例が多いのであるが「伊香保ろ」の如き「せろに逢はなふよ」「兒ろ」の如く、ろ音の接尾語的につく場合もあり、その他種々の方面に方言としての特色が見える。これ等の方言を含んだ歌にしても必ずしもその地方の人が歌つた場合に限らず、都人が地方に來てその特殊な言語に興味を持つて歌つた場合もあらうが尙全體として地方人の歌が多いであらう。かういふ點から東歌は萬葉時代の地方語を見る上に必要な材料である。この事は既に新村博士その他によつて研究もされ最近の方言研究の隆盛になるに從つて一層注目されて來た點である。たゞ萬葉時代の方言とそれ以後の關東方言との關係は尙種々考察すべき點があるであらう。

その他東歌に關しては種々考察すべき點も多く今迄ふれて來た點に關しても、夫々精細な吟

味を要すべき點が多いのであるが夫等はこの小論には盡し難い點であり、種々の方によつて研究されて欲しいと思ふ。東歌は東國地方の歌であるといふ點からも常陸風土記等と共に東國に居る者によつてその土地の踏査をはじめ極めらるべき點が萬葉集の中でも特に多いのである。最後に東歌の個々の歌の作られた年代は必ずしも萬葉初期であるとは言ひ難い。萬葉後期に屬する歌も相當にあらうが、然し年代の如何に拘らずその歌が萬葉初期の特質を有して居り、素樸純眞といふ點が中心となつて居る事は土地といふ關係が時間的な點と合せて考へらるべき事を示すものである。

七　萬葉集の歌枕

この夏紀州の歌枕を少しく尋ねてから、急に日比野道男氏の萬葉地理研究の紀州篇と、阪口保氏等の兵庫篇とを讀んで見た。どちらも丹念な調で得る所が多かつた。かつて辰巳利文氏が萬葉歌枕研究の草分けをはじめられて大和萬葉地理研究を出されてから、萬葉歌枕研究は萬葉研究の重要な一分野となつた感がある。もとよりそれ以前も萬葉歌枕研究は行はれた事は鹿持雅澄の萬葉集名所考によつても知られるが、所謂實地踏査を主とするやうになつたのは辰巳氏などを草分けとしてもよいであらう。それ以後萬葉歌枕に關する論文や文章の雜誌に出ることはおびただしく、成書となつたものも前述の三書の外に九州の萬葉歌枕もかかれた、最近は瀬戸内海の萬葉歌枕もまとめられたやうである。その他、萬葉集の註釋書にも、歌枕の實地踏査の結果がとりいれられることが多いのは、例へば鴻巣氏の萬葉集全釋の如きその著しいものである。

かういふ歌枕研究が盛んになるとともに、その方法も段々進んできた。古い萬葉時代にうた

はれた土地が年月の經過の中に部分的には多少の變化は免れないに拘らず、さういふ點を無視したやうな調べ方もないではなかつたらうと思はれるが、最近に於ては、地理學や考古學の立場も加へられてきた。その著しい例は吉野宮瀧の所在地の研究で、この夏も、宮瀧の葺石の發掘を數年つづけられて居る方に逢つて、その葺石のある部分の調査圖を見せて貰つたりしたが、ここまでくると萬葉の歌枕めぐりが本當の學問になつてくるやうに感じた。

もとよりここまでくると萬葉の文學的研究の領域を乘り越えたやうにも感ぜられるのであるが、しかし萬葉地理研究と冠する以上はここまで進むべきであらう。さうしてこゝまでくる時には萬葉學徒と地理學者、考古學者との提携の必要が切に感じられるのである。

萬葉集の土地を大觀的にながめると大和を中心として居ることは言ふまでもなく、大和地方にかなり多くの萬葉歌枕が見られるのであるが、大和を中心として近くは難波と紀伊と近江と伊勢の四方にのびて居るが、この中難波と紀伊が最も多いのはいふまでもない。この四地方の線をのばすと難波からは瀨戸內海をへて北九州に至つて居り別に山陰道の石見にも人麿の關係で多くの歌枕がある。近江からは越中をはじめ北陸の方の歌枕に結びつけられ、伊勢からは東海道をへて東國地方に至つて居る。ただ紀伊だけは海になつてゐて、そこで終つて居る。それ

だけに難波の旅行は瀬戸内海をへて九州に至る出發地のやうに考へられるが、紀伊の旅はそこを目的として居るだけに、萬葉人が最も近い距離で旅らしい氣分を味つたのは紀伊の旅ではなかつたかと思ふ。この事は大和と紀伊の境になる眞土山の歌を見ても知られるのである。私も隅田から眞土山の邊りを歩いて、國境を流れて居る落合川の兩國橋の上で暫く顧望してゐたが、この邊りまできて萬葉人が故郷をはなれて旅に出たといふ氣分がしみじみ感じられるのだと思つた。

眞土山夕越えゆきて廬前の角太河原にひとりかもねむ（卷三）

しみじみとした旅の情趣が感ぜられる。今のやうな汽車のない時、紀川を下つて妹山脊山を見つつ和歌浦まで出るのは相當の旅であつたであらう。それでも和歌浦のあたりまでは旅の哀愁はあつても旅の苦しさはなかつたであらう。紀溫泉即ち今の湯崎までの旅は萬葉人もしばしば行つて居るが、その途中の黑牛潟や白崎や岩代、南部なども多くよまれて居り、岩代の邊りでは

家にあらば笥にもる飯を草枕旅にしあれば椎の葉にもる（卷二）

といふやうに旅の異なつた風物を興味あるものと考へられたやうである。さうして熊野の旅ではたとへば

苦しくもふりくる雨か三輪が崎狭野のわたりに家もあらなくに（卷三）

の如きを見ると旅の苦しさが見られるやうである。かういふやうに紀伊の旅も奥深くゆくほど歌の情緒が異なつてくるやうに見られる。がこれをひろく萬葉の旅の歌からしらべて見たら種々の推測も得られようと思ふ。

萬葉集の歌枕の中で、伊勢から東海道を下つて常陸地方に行くまでの地名も相當にあるが、範圍が廣く散らばつて居る爲めかまだ調べがまとまつてゐない感がある。もつとも眞淵の遠江の歌だけの解や、橋本直香の上野歌だけの解はあり、常陸は常陸風土記の調べのためにその土

地も比較的よく調べられて居るが、全體としてはまとまつてゐない。東海道萬葉集歌枕も是非まとめられるべきと思ふ。尾張や三河の歌枕にもなほ疑問の點が多いやうである。たとへば萬葉集卷一の長忌寸奥麿の

引馬野ににほふ榛原入り亂り衣にほはせ旅のしるしに（卷一）

高市連黑人の

何所にか船泊すらむ安禮の崎こぎたみ行きし棚無し小舟（卷一）

の引馬野や安禮の崎の如きも疑問がある。註引馬野は多くの註釋書では遠江の方とされて居るが、三河の御幸の時の歌であるから、やはり三河にしたい地名である。ところが最近宇井伯壽氏の御話によると、氏の御鄕里に近く引馬野といふがあり、またその附近の地圖が出てきてそれに安禮の崎といふ地名も記されてゐるさうで、さうすればこの地名は三河にあるといふこと

が證明されることになる、これについてはいづれ委しい報告がなされるであらう。これに關聯して高市黑人が、三河尾張に關する歌を比較的多くよんでゐることは注意される。

櫻田へ鶴なきわたるあゆち潟潮干にけらし鶴なきわたる（卷三）

のすぐれた歌もそれである。單なる旅であつたか、何等か黑人がこの地方に關係でもあつたであらうか。

註

「引馬野」と「安禮の崎」とを三河とする見解に對しては「引馬野、安禮之崎考」として發表し、萬葉集考説に收めた。これに次いで市川寛氏の「引馬野・安禮之崎考を中心にして」といふ論文も發表された。

八　萬葉集の歐語譯

萬葉集が日本の代表的な古典文學として古來から研究されてゐることは言ふまでもないが、その價値は世界に認められて、今や世界文學史上の重要な作品とならうとして居る。歐米に於ても萬葉集の研究は盛んになり和蘭のピヤソン氏の如きは卷一からはじめて一卷一册づつの委しい英譯をはじめて四卷まで完成して居ることはすでに紹介されて居る所である。ピヤソン氏の英譯が二十卷全部完成したら、多少の缺點はあらうとも萬葉集飜譯史上の偉觀となるであらう。恰度昨年の十一月の末に和蘭に旅行して、アムステルダムの郊外のラーレムに雪のちらちら降る日にピヤソン氏の閑居を訪れて、親しく萬葉集研究の事など話したことはやはり懷しく思出される。ピヤソン氏は文學的といふよりは語學的方面に興味を寄せて居られるので、その譯や註も文學的味ひには缺けて居る點もあるやうであるが、しかし散文と異なつて詩歌の外國語譯は原作の韻律とか文學的情趣を傳へるよりは、意味を忠實に傳へる方がより好ましいでもあらう。この點では古今集のやうな調のみを本位とする歌集と異なつて、萬葉集は意味の上の

みでも相當に複雜で變化もあり興味も深いのであるから、古今集に比すれば外國語譯を行ふことがより容易でもあり効果的でもあるであらう。かつてボノー氏が萬葉集よりも古今集の方を先きに飜譯すべきだと言はれて居たが、私としては以上の意味からも萬集集の方が古今集よりも飜譯が容易であり、効果も多いと考へて居る。古今集の全部の英譯はすでに若目田氏のが出來て居るのであるが、それを一讀しても古今集の外國語譯は殊に容易ではないことを感ずるのである。

さうして萬葉集の英譯はピヤソン氏の外にも部分的には種々の人によつて試みられて居るのであり、日本古典文學の研究に一生をさゝげて居られるフロレンツ博士も萬葉集の註釋を大部分完成して居られることは博士自ら言はれて居り、そのことはかつて記したことがある。こゝでは博士門下のアルフレッド、ロレンツェン氏の萬葉集の人麿の歌の獨逸譯に就いて一言したいのである。

ロレンツェン氏の人麿の歌の譯は千九百二十七年にハンブルグで出版されて居る。九十五頁ほどの小冊子であるが、初めの四十七頁が歌の獨逸譯であり、後の四十頁ほどが人麿論になつて居る。長歌十八首、短歌六十三首ほど譯して居て人麿の歌を殆ど全部譯して居るのである。

人麿論ははじめに總論として日本文化と支那文化との關係や人麿の萬葉歌人としての位置をのべ、次に人麿の生活を敍し、更に人麿の仕へた宮廷、ならびに宮廷歌人に就いて考察して居る。つゞいて長歌の內容、動機及び構成に就いて論じて居る。更に短歌をとき、漢詩と比較し、妻の死をいたむ詩の例歌によつて比較して居る。進んで人麿の歌の枕詞と序詞をとき、對句を論じて居る。最後にアニミズムを說き死の觀念や葬のことなど說いて居るのである。格別に注意すべきほどの新見は乏しいとするも人麿論としてはなか〳〵まとまつて居る。終りに枕詞を集めて解釋して居るのもゆき屆いて居る。

獨逸譯を一二首紹介して見よう。原歌を羅馬字で書き譯を添へてあるが、一句ごとに對照させてある。たとへば

さゞなみの志賀の唐崎さきくあれど大宮人の船まちかねつ（卷一）

2, Wenn auch das Karasaki von Shiga

1, bei Sasanami

3, ruhig dalag,

4/5, habe ich doch die Schiffe der Höflinge nicht erwarten können.

言語の意味は正しく平明な譯である。

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたむきぬ（卷一）

1, Am östlichen Felde

2/3, zeigt sich die aufgehende Sonne,

4, und wenn ich zurückblicke,

5, neigt sich der Mond herab.

去年見てし秋の月夜は照らせれど相みし妹はいや年さかる（卷二）

2, Wenn der Mond der Herbstnacht

3, Auch scheint,

1, Wie Wir ihn im vergangenen Jahr sahen,

4, so tremt sich die Geliebte, mit der ich ihn betrachtete,

5, mit den Jahren immer mehr und mehr von mir.

是等は比較的平明な例であるが、歌の意味はほぼ正しく譯されて居るのである。序にピヤソン氏の英譯をも一二首擧げて置きたい、ピヤソン氏の英譯は萬葉集の原歌を漢字のまゝ擧げ、それに羅馬字で書いたのを添へ、英譯をして居る。その上ピヤソン氏は本文校異や異訓を擧げ、また文法の項をも擧げてあるので相當に詳密な註釋である。たとへば額田女王の御歌

君待つと吾戀ひ居れば我屋戸の簾動かし秋の風吹く（卷四）

(1/2) While I am waiting for my Lord and longing for him,

(3/4) the bamboo-blind of my house is agitated;

(5) it is the blowing of the autumn-wind.

更に他の一首を擧げると

今のみのわざにはあらず古の人ぞまさりて音にさへなきし（卷四）

(2/1) It is not a question only of these days,

(4/3) indeed people of former times, more than I

(5) wept loudly.

譯のどうかと思はれる所を拾へば、種々の點もあらうが、とにかくこんな風で萬葉集が外國人によつて譯されることによつて次第に、西歐人にも親まれてゆくことは愉快なことである。日本に於ても學術振興會で英譯萬葉集が進行して居るのであり、萬葉集が世界の隅々にまで親まれてゆく日も遠い事ではないであらう。萬葉集や源氏物語の如き作品は西歐文學の中に出しても堂々と存在を誇り得る作品であることは西歐人も十分認めるやうになつたのである。

九　萬葉集の世界文學性

一

日本文化が世界から注目されて來るに從つて、日本文學もまた歐米諸國において關心の的となつて來たことは喜ぶべき現象である。かくして歐米において日本文學が研究されるとともに、日本においても日本文學の優秀なるものを海外に紹介しようとする企ては學術振興會における萬葉集の英譯を初めとして多く行はれてゐるやうである。昨年から今年にかけて歐米を旅行した私にもこの問題は常に腦裡を往來してゐたことであつた。そこでこゝに萬葉集の世界文學性といふ點についていさゝか私見を述べて見たいのである。

歐米にあつて種々の人にもあひ方々の旅行をした中で、印象の深かつた一として、ドイツのハンブルグでカール・フロレンツ教授を訪問したことを擧げたい。氏は東京帝國大學文科に二十餘年もドイツ文學を講ぜられ、傍ら日本文學の研究をされ、古代詩歌の飜譯その他があるが、殊に日本文學史の著書は最も代表的のものである。從來日本文學史に關する歐米人の著書はア

ストンの文學史をはじめ若干あるが、フロレンツ教授の文學史が最もすぐれて居る。私は明治時代の歐米人の日本文學の研究書の中ではフロレンツ教授の日本文學史とチヤンバレン翁の古事記の英譯とが最も注目すべきではないかと思つてゐる。もとよりフロレンツ教授の文學史も明治三十八年の刊行であるから、三十年ほど前の著書であり修補すべき點はあるが、今日においてもなほかつすぐれた文學史であることは最近に至つてその日本語譯が出たことによつても分る。

氏は大正三年ハンブルグ大學の日本文學教授となつてドイツに歸られてから、最近までハンブルグ大學で萬葉集、祝詞、古今集その他の日本古典を講ぜられてゐた。十年前にも古今集の註釋を發表され、謠曲のドイツ語譯も時々發表されてをり、萬葉集の註釋も多年つゞけてをられる。從つて教授の門下には日本の古典を研究するものが多く萬葉集の柿本人麿や大伴家持の論文をまとめた人もあり、續日本紀の宣命を論文に書かれた人もある。さうして私がハンブルグ大學の日本文學研究室を訪れ教授にあつたのは昨年の十一月の半ばであつたが、教授は日本文學について種々語る中、日本を眞に理解するにはその根源である日本の古典を研究しなければならないといふ考へから、萬葉集等を研究してゐるといはれた。さうして萬葉集は世界文學の

價値があるといはれた。

萬葉集は世界文學の價値があるといふ言葉は私にも同感されるし、また種々の問題を與へてくれるのである。萬葉集は日本文學の有數なる作品であることはいふまでもないが、同時にそれが世界文學であるといふことは如何なる意味を有するであらうか。

世界文學についてはかつてアメリカのムウルトン教授が世界文學といふ書物を書き、歐米の代表的文學として、聖書、ホーマ、ダンテ、シエイクスピイヤ、ミルトン等を擧げて世界文學としてゐる。即ち世界の代表的文學といふほどの意味である。さうして萬葉集が世界文學であるといふことは世界文學史の中に代表的作品として加はるべき作品といふほどの意味であらう。このことは萬葉集のみならず日本文學が全體として世界の文學の中に入るべき價値あることは考へられてゐるところである。ムウルトンの世界文學の中にはまだ日本文學は入つてゐないが、現在世界文學を書く場合には日本文學は必ず入り得るものであるし、また入れなければならないと考へられる。

さうして日本文學が世界文學となり得ることは承認された事實であるとして、世界文學の意味をさらに考へて見ると藝術的にすぐれてゐるといふことは言ふまでもないが、これを別の立

場から考へると二の點が擧げられる。

第一は世界の人に相當に理解されるといふことが必要になる、少くともそのことがその文學の早く世界に認められる機緣になるのである。然しより根本的なる點として第二にその作品の個性をはつきり有してをるべきことを擧げたい。日本文學ならば日本的特質を最も豐富に持つ作品であることが必要である。この二の點をさらに詳しく敷衍して見たい。

第一に、世界に理解されるといふ點を中心にして考へると、文學は他の藝術に比して世界に理解される點に遲れる傾きがある。繪畫や彫刻、音樂等の線や色や音等から成る藝術は直接感覺によつて理解されるために、一應の理解は早く得られるのであつて、浮世繪や、根附等が早く歐米に傳へられ歐米の博物館に極めて多く藏せられ、鑑賞されたのもその理由による。然るに文學は言語による藝術であつて、言語理解をまたなければならないから理解が容易でないのである。もとよりこれは直接に原作を讀むことによつて理解されるほかに、外國語に飜譯するといふ手續きによつて理解されるのであるが、飜譯による原作の紹介といふことは限界があるのであるから、飜譯の困難なものほど世界に理解されることが容易でないのである。

二

かくて文學の中でも演劇のごとく音樂性や舞踊性と文學性との綜合になるものは、音樂性や舞踊性の力によつて理解されることが比較的容易である。能樂や歌舞伎が言語的理解を除いてもある程度の理解は可能であるのはそのためである。さうして散文と律文との上からいへば、律文もしくは詩歌は音樂性を含んでゐる點からいへば散文よりも理解が容易であるやうであるが、しかし詩歌における音樂性もしくは韻律性は、言語の上に存する韻律であるから言語理解を除いては容易に理解されないのであるし、殊に飜譯といふ場合においては、詩歌の韻律は到底飜譯では傳へることが出來ないために散文の飜譯ほど容易ではないであらう。源氏物語のウエレイ氏の飜譯が歐米に極めて好評であるに對して、外國人の日本詩歌の飜譯が努力の大きいに拘らず比較的認められないのは、さういふ點も一の原因であらう。

然し同じく詩歌でも必ずしも一樣ではないのであつて、古今集のやうな調が中心であり、殊に調の微妙な作品は飜譯が困難であり、譯文によつて原作の味を理解することは容易でないのである。これに對して萬葉集においても調は重きをなしてをるが意味內容が古今集よりも重きをなしてをり、また調も古今集ほど微妙でなく、素樸であるから飜譯によつて原作の味を傳へやすい。この點から日本詩歌の飜譯といふ點からすれば古今集よりも萬葉集の方が効果が多い

といふことになる。かつてボノー博士は萬葉集の飜譯よりも古今集の飜譯を先きにすべきをいはれたが、以上の理由から萬葉集の飜譯の方がより容易であると思ふ。これに關聯して思出されるのは北米合衆國のワシントンの議會圖書館の日本部長をしてゐる坂西女史が明治の和歌の飜譯をして先づ石川啄木の歌を譯し、次に與謝野晶子氏の歌を譯されたが、啄木の歌の方が米國人に評判になつたのは、先きに刊行された理由もあらうが啄木の歌は飜譯によつて原作の味を傳へるに容易であるに對して晶子氏の歌が飜譯によつては傳へるに困難な點が大きな理由であらう。

さうして飜譯によつて原作の味を傳へやすい作品といふことは、一方からいへば原作が外國人にも理解され易い作品といふことにもなるであらう。外國文學を理解するのは自國語に改めて理解することに結局はなるであらうし、それだけに外國文學を理解するには限界があるといふことも考へられるであらう。さうして世界文學といふことは從來は西歐において考へられたために、西歐人の視野に入り、理解の範圍に入つて來る文學作品によつて世界文學の概念が構成されたのである。そのために日本文學が世界文學となるためには西歐人に理解されるといふことが必要條件であつたために、以上のやうなことをのべたのであるが、日本を中心にして世

界を考へるやうになりつゝある現狀においては、日本文學を中心にして世界文學を考へる時期に達したとも見られるので、日本文學が西歐人に理解されることは日本文學が世界文學となる不可缺の條件とはならないであらうが、しかしなほ日本人のみが理解出來て、西歐人には全然理解されない文學は世界文學としての價値を認められるのに多少の困難があらう。しかし理解されることの難易は世界文學の立場からは第二義的な點である。

日本文學が世界文學としての價値のある根本的な點は日本的特色を有することでなければならない。やゝもすれば世界文學といふのは日本的特色をなくして、普遍的な人間性を中心とする文學となることであらうと考へられる傾向があるが、かくのごとき日本的特性のない文學は日本文學としても優れた作品でないとともに、世界文學としての價値を有するものでもないのである。この點は言語においても生きた世界語といふのは日本語、英語、獨逸語といふやうな國籍を有して、しかもなほ世界に用ゐられる言語であるのと同樣である。民族性や國家性をなくした世界文化は抽象的なものであつて具體的な文化ではないのである。西歐において日本文化や文學が尊重し關心を持たれる場合においても、日本的特性を失つた日本文化や文學ではないのである。西歐にない日本的特性を有した文學にしてはじめて日本文學としての意義を認め

られるのであり、かくの如き日本的特性の優秀なる點を有することにおいて世界文學となり得るのである。フロレンツ教授が自分は歐米文化の影響をうけない日本文化を愛すると言はれたのは多少の異國情緒を愛する心持があるにしても、西歐的なるものと全く同樣なる日本文化は西歐文化の模倣に過ぎないと考へるのであらう。西歐文化に認められない日本的特性があることによつてその價値も認められるのである。文學の日本的特性もしくは日本的樣式といふことは日本文學には離すことの出來ない點であり、それゆゑに日本文學の價値もあるのであり世界文學としての價値も存するのである。

日本文學の文學的價値といふ點からいつても日本的特性もしくは民族性といふことは重要な要素を占めるのであらう。日本文學が言語性、藝術性、民族性の綜合の上に成つてゐると見られるのであつて、日本的特性といふことは日本文學の必然的な要素である。さうして以上のやうな點から見て、日本文學の中から世界文學の中に入るべき作品を選ぶとすれば如何なる作品が擧げられるであらうか。かりに十の作品作家を擧げるとする場合、私はかつて、古事記、萬葉集、源氏物語、平家物語、世阿彌(能樂)、近松、西鶴、芭蕉、默阿彌(歌舞伎)、漱石を數へて見たことがあつたが、この中、古事記は建國の由來を說いた國典といふべきであつて、文學

としてのみ見ることが出來ないのであり、また古今集や新古今集を加へるべきであるといふ説も出ようし、明治以後については鷗外その他を擧げるといふ見方もあり得るし、能樂、歌舞伎としてならば別として世阿彌、默阿彌といふ作家を擧げることに不穩當を感ずる人もあらう。

ともあれこゝに擧げたやうな作品が日本文學の代表的作品として考へられるのみならず、世界文學としての價値も十分有してをることは認められるであらう。特に萬葉集の如きは成立年代といふ點とも合せて、世界文學史の中でも有數な位置を占むべき作品であると思ふのである。